
桜高軽音部！

式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜高軽音部！

【Nコード】

N9930G

【作者名】

式

【あらすじ】

平沢唯、秋山澪、田井中律、琴吹紬の四人が奏でる四重奏にひとりの少年が加わり五重奏に変わる……さあ、いったいどんな曲を奏でてくれるの？

#1 入学！（前書き）

オリキャラ注意！

#1 入学！

けいおん！

#0 入学！

春の気持ちいい朝――

澄んだ青空の下

辺りに同校の生徒の姿はない。

学校に続く大通りだから、本来、生徒で賑わっているはずだった。

今日が、休日というわけでもない。

つまりは……生徒が登校すべき時間ではない、ということ。

けど、そんな閑散とした光景を目の当たりにしても俺は焦ることなく、悠長に歩き続けた。

何しろ早く家を出過ぎ時間が有り余っているのだから……

現在の時刻、AM 7:39

「目覚まし時計が8時半で止まってんだものなあ……そりゃあ慌てて家を飛び出すだろ普通……」

愚痴をこぼしながらひとり寂しくとぼとぼと学校に向かう。

遅くなっ たかもしれんが自己紹介をさせてもらう。

俺は福間 空。

今日から私立桜が丘高校の一年生になる普通の男子学生だ。

俺が向かっている学校。

私立桜が桜高校について説明しておく。

私立桜が丘高校は、元々は女子校で突然、今年から共学になった少し変わった高校。

共学になった理由は未だに不明。

噂では理事長の思いつきだとかなんとか…

ってことを説明してるうちに学校に着いてしまった。

学生ズボンの右ポケットに入れてある携帯電話を取り出し時間を確認してみる。

A M 7 : 5 2

「まだ時間あるけど、どうすっかなあ」

入学式が始まるまでの時間をどうやって過ごすのかを考えつつ校門をくぐる。

「まあ、何はともあれ……今日から高校生!!」

俺は何かが始まるかもしれないなんて、根拠の無い期待を抱いて…

———新たな日常へと飛び込んでいった———

#2 入部！（前書き）

基本はアニメをベースにしていくつもりです。

#2 入部！

けいおん！

#1 入部！

そんなこんなで、入学式。

無駄に広く教会ぼつい（木の長椅子が教会ぼついで）体育館で入学式が行われる間、俺と言えば新しい学び舎での希望と不安に満ちた学園生活に思いをはせる訳でもなく、ただひたすらに襲いかかる睡魔と戦っていた。

眠い。眠すぎる。何か他のことでも考えて眠気から気を逸らすか。

俺は自分が今着ているブレザーを見た。

今さらながら俺はブレザーを着るのは初めてで少しだけテンションが上がっている。

これについては、今壇上で眠気を誘う音波を長々と発している校長にちょっとは感謝する。

そんなことを考えているあいだにテンプレートでかなり長々しくダルかった入学式がつつがなく終了し、俺は配属された1年5組にこれから一年間は嫌でも面を突き合わせなければならぬクラスメイトたちとぞろぞろ入った。

担任の自己紹介の後、

「みんなに自己紹介をしてもらおう」

と言い出した。

ありがちな展開だったため、心積もりもしてあったから驚くほどでもない。

出席番号順に男女混合に並んでいる右端から一人一人立ち上がり、氏名、出身中学プラス趣味をあるいは顔を真つ赤にし恥ずかしそうにぼそぼそと、あるいは無駄に元気よく喋りながら、あるいはお上品に喋りながら、徐々に俺の番に近づいてきた。

なんだか妙に緊張する。なんとなく解るだろ？

俺は自分の番までの数十分で考えた最低限のセリフを言い終え、俺は着席した。

それから自己紹介も滞りなく進み、高校生一日目は終了した。

今さらながらに思う。

クラスメイトのほとんどは女子。男子は数えるぐらいしかいない。

しかも、中学が同じで比較的に仲のよい奴らは違うクラス。
本当に俺はこの学校でやっていけるのだろうか、と。

結果から言おう。案外やっていけると。

三週間も過ぎれば案外とこの環境に慣れ、俺は新しい友達を作っていた。

まあ、その友達は数少ない男子ではなく、比較的、いや、かなり可愛い部類に入る女子3名なのだが。

「空、軽音部に入部しろよ！」

ここ一週間、聞き慣れた同じセリフをショートカットにカチューシヤが特徴の元気娘、田井中律が今日も言ってきた。

俺は、ここ最近悩んでいた。

田井中の話によると今月中に最低でも四人は部員を確保しないと軽音部は廃部らしく、俺としてはギリギリになっても部員が入部しなければ入部してもいいと考えている。

今日で四月も後半。

そろそろ、かな？

いや、まだ一週間ある。もう少し待つべきか？

などと、俺が悩んでいると、

「律！そんなにしつこく空を勧誘するな。ムギもそう思うだろ？」
「はい。私も澪ちゃんと同じ意見かな。でも、空くんとも一緒に軽音部で活動が出来たら楽しそうだなって思ってるわよ？」

俺の席（窓際後方二番目）にさらに二人の少女がやって来た。

田井中に注意した少女は秋山澪。

綺麗な長い黒髪と女子にしては高い身長が特徴の美少女。

もう一人の少女は琴吹紬。

ぽわぽわとした空気を常に装備している本物のお嬢様だ。

「どうよ？ムギもこう言ってるんだから入部しろよ？」

「律！」

「だって！バンドも組まないまま廃部なんてやだもん」

また秋山と田井中が言い合いを始める中、俺は決断した。

「……わかった。軽音部に入部するよ」

「本当に！？」

田井中は俺の手を取り上下に激しく振る。

「本当にいいのか？」

「そうですよ？私が言った事なら気にしなくても」

秋山と琴吹は申し訳なさそうに尋ねてきた。

だからお前は、

「気にするな。俺も琴吹や秋山。それに田井中と部活動が出来たら
楽しそうだなって思ってたし」

照れ笑いをしながらそう言った。

こうして、俺は桜高軽音部に入部をしたのであった。

これからが楽しみだ。

#2 入部！（後書き）

遅筆過ぎ……

来週までには#4まで投稿する予定です。

#3 軽音部！

けいおん！

#2 軽音部！

軽音部に入部することを決めた俺であったが、残念ながらすぐには軽音部の部室に行くことが出来なかった。

ちょっとした用事があつた為である。

翌日――

部活に入部する為には、入部届に学年・クラス・氏名・動機を書く必要がある。

と、言うことを朝のHRが終わってすぐに秋山から聞かされた俺は、すぐに職員室に向かい入部届を貰って教室に戻った。

入部届は休み時間を使い書いていたが、田井中に邪魔（入部動機に、美少女（田井中律）と一緒に青春を謳歌したいから。などと書いたのでとりあえず一発ゲンコツを喰らわしておいた。）され意外に時間がかったが書き終え、提出しこれでやっと軽音部に入部することができた。

放課後――

「楽しい楽しい部活の時間だぞ空！！」

えらく興奮した律が俺の席まで来てそう言った。

「わかったわかった。だから、少しは落ち着け田井中」

田井中にこう言っている俺だが、実は俺も少しはワクワクしていた。

振り返ってみると俺は何の部活もやってこなかった。

部活をしていなくても学生生活はそれなり楽しかったが、部活をやっていた奴らはさらに楽しそうだなと俺は思っていた。
だから、部活ってやつに憧れみたいな感情を持っていたりしたのだ。

「ほれほれ、はやく部室に行くぞっ!!」

田井中は、俺の手を握り軽音部の部室である音楽室に引っ張って行くとした。

「ちよっ!ま……」

突然、手を握られ恥ずかしくなり抵抗をしようとしたが……

「さあ、一緒に部室に部室に行きましょうっ！っ！」

琴吹が俺の背中を押しながら言った。

琴吹…お嬢様なのに意外にチカラ強っ！

「ま、待て。まだカバンが！」

「零、空のカバンはよろしく」

「ま、待てっ、律！」

秋山の静止の声も虚しく部室まで強制連行されてしまった。

トホホ……まさか女子二人に連行されるなんて…

部室に着いた俺はとりあえず椅子に座らされた。琴吹は紅茶の用意をしてくれ、用意が出来たぐらいには秋山も部室にやって来ていた。

俺のカバンを持ってきてくれた秋山にはもちろん礼を言った。

それから、メンバーが全員揃っても部活動らしい事は特に何もせず雑談をしている。

これでいいのか？などと思いながらも俺も雑談に参加しているのだが

カチャッーと扉の開く音がし、

「こんにちは」

と、声をかけられた。

俺たちは雑談を一旦、止め扉の方を振り向き、

「「こんにちは」」

と挨拶をした。

音楽室に入ってきた女性は、音楽教師の山中さわ子先生。
美人で物腰の柔らかくお淑やかな教師だ。

山中先生は軽音部にまた一人入部希望者が増えたとか言っ
て、入部届を田井中に渡し、ティーセットはしっかりと片付けるよ
うにと言
って音楽室を出て行った。

田井中たちは新入部員のこと盛り上がっているようだが、俺は
琴吹の用意してくれた紅茶をお代わりし、まったりとくつろいで
いた。

さつきから聞き覚えのある名前が会話に出てきてるんだけど
気のせい
いか？

山中先生が去ってから、数十分が過ぎた頃。

音楽室の前で誰かの声が聞こえ、それが気になった田井中
はその正
体を確認しに行った。

数分後――

勢いよく扉を開け田井中が、

「みんな、入部希望者が来たぞ！」

と大声を出しながら音楽室に入ってきた。

すると、秋山と琴吹は立ち上がって、

「ようこそ、軽音部へー!!」

「歓迎いたしますわっっ!!」

と、入部希望者を歓迎した。

俺も立ち上がって入部希望者に歓迎の言葉でも言っておくべきなのかと考えたが、俺は今日、入部したばかりだし別にかまわないだろうという結論に至った。

とりあえず、顔だけでも見よう俺はチラッと入部希望者の顔を見た。

そして、俺は飲んでいた紅茶を噴いた。

「汚いぞっ！」

秋山は割と大きな声で注意したが、俺はあえて無視し、目の前にいる少女と話す。

「な、なんで唯が!？」

「あれっ? 空くん？」

「なんだ? 知り合いなのか？」

「あ、ああ」

平沢唯。

中学からの付き合いで三年間同じクラス・席も常に近くて知らず知らずのうちに仲良くなっていた少女。

俺は大まかに唯との関係を秋山たちに説明した。

「そうなのか。まあ、とりあえず、ムギお茶の準備だ!！」

「はいっ」

琴吹がお茶の準備をしている間に、自己紹介と軽音部が直面していた問題を話した。

「空が入部してくれて廃部は何とか免れたけど、部員が増えることは良いことだっ！本当に入部してくれて、ありがとう！」

田井中は俺の時と同様、唯の手を強く握り、激しく上下に振った。

しかし、唯は軽音楽部に入部することを躊躇っているような気がした。

多分、コイツ入部するのを辞めたいって言いたいんだろうな。

何せ、唯が出来る楽器ってカステネットぐらいのものだからなあ。

だから、俺は、

「なあ、俺たちに何か演奏を聞かせてくれないか？」

（唯は、入部を辞めたいようだ）

と、田井中に質問をしながらアイコンタクトをした。

「もちろん、いいわよっ！」

（せっかくのカモをここで手放す訳には行かないぜえ）

田井中は秋山にアイコンタクトを出した。

（せっかくの新入部員）

秋山から琴吹へ

（なんとか引き留めないと）

見事にアイコンタクトが続いていった。

なんかぁ、すげえよ。

「えっ？演奏してくれるの！？」

先程までどうやって辞めたいと言おうか悩んでいた唯は、急に興味津々とし明るい表情をした。

予想以上に食いついてきたよ

そして、俺を除く軽音楽部メンバーによる小さな小さなライブが開催された。

#4 演奏会！（前書き）

これで、アニメで言うと#1 廃部の話が終了です。

#4 演奏会！

けいおん！

#3 演奏会！

田井中たちが、演奏してくている曲は“翼をください”だ。

演奏は……まあまあってところだろう。

田井中の演奏するドラムは走り気味で、秋山はそれに合わせようと
してミスをしている。

琴吹は、普通に上手い。

でも、何だろう…音楽が好きで楽しんで演奏をしている感じが伝わってくる。

技術で音楽を奏でるのではない。確かに技術も必要だけど、一番大切なのは音楽を好きってこと。
その気持ちをどれぐらい音と一緒に奏でるか……

俺はそう教えてもらったから

パチパチー

と、俺と唯は三人に拍手を贈った。

「えへへ どうだった？」

演奏を終えた田井中が、恥ずかしそうに頭を掻きながら感想を尋ねてきた。

「なんていうか……すごく言葉にしにくいんだけど……」

どうしてだろう……次に唯が言わんとしよう言葉が手に取るようにわかる。

間違いなく天然が発動するに違いない。

「あんまり、うまくないですね……!」

予想を反することなく唯の天然は炸裂した。

間違いなく田井中あたりは、

（バツサリだぁー）

と心の中で思ってるはずだ。

どうして、コイツは言わなくてもいいこと素直に言ってしまうのだらうか？

「でも、なんだかスッゴく楽しそうでした」

「私、この部に入部しますっ!!」

3人は大いに喜び、田井中は唯に抱き着いたりし、秋山や琴吹たちは握手したりと早くも友好を深めている。

まあ、良かったよな。

俺はそう思いながらこの光景を見ていた。

「ちよつと失礼」

そう言つて、田井中は秋山のカバンからカメラを取り出した。

「じゃあ、軽音部活動開始記念に」

「あつ、私のカメラ……」

秋山はカメラをいつも持つてきてるのか？

などと、俺は考えていると琴吹に引つ張られ唯の横に並ばされる。

なんだあ？やっぱり琴吹は力が強いのか？

「いつくよ〜ん」

と、言つて田井中はシャッターボタンを押した。

どんな感じで写ってるかは、わからんが間違いなく田井中は写ってない気がする。

「あ…でも、私、全然楽器できないし……」
「あつ！マネージャーとかどうかなあ！？」
「いや 運動部じゃないから」

パチツと手を合わせて何かを思いついた琴吹。

「そうだ！この機会にギターを始めてみたらどうかしら？」

「で…でも、ギターってすごくむずかしそうなイメージが…」

「大丈夫だよっ！私たちも分かるところは教えてあげるし」

唯は秋山たちの顔を見て、少し考え、

「そうだね。さっきの演奏聞いてたら私にも出来るかもって思えてきたよ！」

と、答えた。

「それはよかった」

田井中・秋山・琴吹。三人は何とも言えないような複雑な表情をしていた。

アホ唯。

とりあえず後でゲンコツを一発。

「そうだっ！空も平沢さんと一緒にこれからギター始めなよ？」

「そうだな。ギターは2人いても大丈夫だし」

「別にギターやるのはいいけど……まあ、一応はパートだし……」

「マジでっ！？」

「空くん、ギター弾けたんですか？」

「あ、ああ……」

なんか異様に驚かれたのだが……

「いつ、言ってなかったっけ？」

「「言ってないっ！！」」

「すっ………すみませんっ！！」

三人の迫力に屈し、俺はよくわからないまま謝った。

なんだあ…そんなに俺、悪いことしたか？

それから……

「ギターはいつから弾いてたのか？」

とか色々質問をされ、

「大事なことはちゃんと言いなさい」

とか、説教をされ軽音部の初日は終わっていった。

翌日の昼休み――

昨日の唯の“あんまり上手くない”発言が相当ショックだったらしく、田井中たちは音楽室で練習をしている。

「練習だ！練習！」

「今度、演奏する時は絶対に上手って言わせましょう！」

「さあ、練習だっ！」

あのねえ……上手くなるために練習するのは良いことだと思うよ。

でも、なんで昼飯もまだの俺まで音楽室に連れて来られないといけないんだ……！

これも唯のせいだ！

ゲンコツ一発 いや、二発だ――！！

#5 楽器！（前書き）

なかなか投稿が出来なくて申し訳ありませんでした！

#5 楽器！

けいおん！

#4 楽器！

キンコーンカーンコーン

と、放課後を告げるのチャイムが鳴り響いた。

俺はほとんど空っぽ（机の中に教科書を置いているため）のカバンを持ち、部室へ向かう。

田井中・秋山・琴吹の姿は教室にはない。

どうやら先に軽音部の部室である音楽準備室に行ったようだ。

同じクラスなのにまさか置いてかれるとは……

少々、置いてかれたことへコみながら亀やらウサギやらの置物が手すりにくつつけられている階段を上った。

準備室――

「ちーッス」

準備室の扉を開けながら挨拶をする。

部室には俺を除くメンバーが来ていて、すでにティータイムが始まっていた。

恨み言を田井中たちに言う前にとりあえず、ほぼ決まりつつある自分の席に着く。

配置はこんな感じである。

律唯

机机

机机俺

澪紬

席にも着き、落ち着いたので恨み言を言う。

「お前らよくも俺だけ置いてきぼりにしやがったな」

「置いてきぼり？ああ、それは空が隣の子と話をしたから気を使ったんだ」

「そ、そうか。それはすまん。でも、声ぐらいは」
「ちゃんとかけたぞ」

「……………あつ、そうだ！俺が部室に入って来る前、なんか盛り上がってただろ？なに話してたんだ？」

（（無理矢理、話題を変えた！！））

明らかに話題が無理矢理に変えたことをわかっている秋山たち。

しかしながら俺は、

自然に話題を変えたよな……いや、不自然だよな。しかし、唯なら気づいてないはずだっ！

などと考えていた。

みんなは紅茶を飲み、俺のせいで微妙になった空気をリセットした。

唯は、俺が咄嗟にした質問に律儀にも答えた。

「みんなに楽器を選んだ理由とかを聞いてたんだ」

「ほうほう」

「だから、空くんもどうしてギターをやろうと思ったのか教えてよ？」

唯は興味津々といった感じで俺を見る。

さっきのこともあるので、ちょっと真剣に質問に答える。

「そうだな　母さんの　影響かな？」

「お母様のですか？」

予想外。琴吹も興味があるようだ。

「ああ。母さんは音楽が好きでさ、よくギターやらピアノやらを弾いてたから俺も知らず知らずのうちにかな」

「へえーそうだったんだ」

「空のギターの原点は母親だったのか」

「じゃあ、結構前から弾いてたのか…」

「って、もういいだろ！この話は終わり」

無理やり話を終わらせる。あまり、自分の事を話したことがない俺はあまりこう言ったものが苦手である。

「そう言えば、ムギちゃんは合唱部に入りたかったんでしょ？」

「ええ。でも、滅多に出会えないとっても楽しくて愉快的な人達の仲間になりたかったの」

（（珍獣ってことですか……））

多分、俺だけではなく秋山・田井中も心の中で言ったはずだ。

「そう言えば平沢さん。ギターは買ったの？」

「唯でいいよっ」

「ほえっ」

「私すでに、湊ちゃんって呼んでるし」

秋山は少し悩み、顔を真っ赤にし、

「ゆ、唯っ」

と、小さな声で恥ずかしそうに呼んだ。

なんか可愛い……

と思ったけどこれは、秋山には秘密だ。

「そうだった！空も私たちを名前で呼んでよっ！！」

突然、田井中が大きな声で言った。

「はい？」

「はい？じゃあない！私たちは、みんな名前で呼び合ってるけど、空だけ唯以外は名字で呼んでるじゃん」

「そうだった」

「そうなの！だから、はい。どうぞっ！！」

なんちゅう勢いだ。多分、名前を呼ばない限り終わらねえなあ。

俺はしょうがなく名前を呼ぶことにした。

初めに秋山――

「えっと………零」

次は田井中――

「律」

そして琴吹――

「……ムギ……」

めちゃくちゃ恥ずかしい！！
多分俺。いま真っ赤。

たいな……じゃなくて、律たちの顔を見てみた。

何故か名前を呼んだ俺だけではなく、漣たちも顔が真っ赤だ。

「私は？」

「お前は名前で呼んでるだろうが！」

仲間外れにされた、とても思った唯は気の抜ける質問をしたのであった。

「あつ、それで唯ギターは？」
「ん？ギター？」

二分経過――

「ああっ！―そっかゝ忘れた。私ギターやるんだっけ」

唯は本気でギターの事をすっかり、さっぱり、きっぱり忘れていたようだ。

帰りにゲンコツ一発。

「軽音部は喫茶店じゃないぞ」

「えへへ。ギターってどれくらいするの値段？」

「うゝん　安いのは一万円台からあるけど、あんまり安すぎるのはよくないからなあ　五万くらいのがいいかも……」

「五万！？私のお小遣い10ヶ月分　」

「高いのは十万円以上するのもあるよ」

唯は少し考える

なにか思いついようだ。

「…部費で落ちませんか？」

「落ちません」

「当たり前だな」

「とにかく、ギターがないと何も始まらない。空は次からはちゃんとギターを持つてくるんだぞ」

「へいへい。了解です」

漣ってなんか 先生？委員長ぽっいよなあ。

「よしっ！今度の休みにギター見に行こうぜ！おうっ！」

ひとりで言って、決定する律。

こうして今度の休日予定は決まったのであった。

#6 ギター！（前書き）

予想以上に長ったらしくなってしまった……

#6 ギター！

けいおん！

#5 ギター！

休日ー

俺は集合場所に集合時間より十五分ほど早く来ていた。

別に楽しみで時間まで待っていたらなかった訳ではない。

父さんの口癖、

「女性を待たせるのは大変失礼。ですから、二十分前行動は基本ですよ」

を実際に行なったまでである。

それから十分が過ぎた頃には、漑と律、そしてムギがやって来た。
残すは唯だけ……

唯を待つ間、漑とムギは雑誌と一緒に読み、俺と律は何気ない会話をしていた。

「空つて髪長いよな。唯よりちょっと長いくらい？」

「ああ、そうだな」

「伸ばしてるのか？」

「いや、ただ散髪しに行くのが面倒なだけだ」

「どれだけ面倒くさがり屋なんだよ」

呆れた様に言う律。自分でもそう思う。

「でも、本当、綺麗な赤い髪だよな。空って」
「そうかな？」

俺も結構気に入っているこの赤い髪（一応言っておくが地毛である。）
を誉められて恥ずかしくなった。
誉められ慣れてないんだよ！

そんな何気ない会話をする事5分――

集合時間をちよいと過ぎたくらいには唯も到着し、目的地の楽器店へと向かった。

「お金は大丈夫だった？」
「お母さんに無理言って5万円前借りさせてもらった。これから」

計画的に使わなきゃあ」

「唯にしては立派な心掛けだな」

突然、左の店を見て立ち止まる唯。俺たちはその様子を伺う。

「いつ けないんだけど」

と言いつつ、唯は店の方に近づいて行った。

「今なら買える」

「じゃくら」

襟首を掴み注意する律。

一瞬にして先ほどまでの殊勝な唯の姿は消えていた。

まあ、唯らしいちゃあらしい。

それから楽器を見に行く、と言う本来の目的を忘れて俺たちは遊んだ。

まずは女性限定の服を扱う店：婦人物衣料の量販店？とも言うだろうか？まあ、そんな所行った。

こういった所は本当に居心地が悪い。

それは他の女性客の視線を受けるからだ。
痛いよ視線が

次に行った場所はぬいぐるみやら小物やらを扱うファンシーショップ。

さっきほどよりは、全然居心地は良いが微妙に俺は浮いているのではないかと思うが全く気にしない。

婦人物衣料の量販店で著しく成長したこういった場所での耐久力は伊達ではないのだよ！

それから、ムギたつての希望によりゲームセンターにも行った。

ゲームセンターでは、俺の特技のひとつUFOキャッチャーで何が可愛いのか解らんキャラクター“くまぶたさん”なるものを人数分取った。

そして遊び疲れた俺たちは休憩をするため喫茶店へー

注文したドリンク類を皆は飲み終え、まったりとするみんな。

「はあゝ疲れたゝ」

「えへ♪買った」

リュックをポンポンと満足そうに叩く律。

なんだ？なにを買ったんだ律は？　ってか、いつ買ったんだ？

「楽しかったですね」

「次、どこ行こっか？あれ？なんか忘れてない？」

俺もなにか大事なことを忘れてる気が

「楽器だっ！楽器！！」

腕を組みそう言った澪。

「うぉー！しまった！？」

「本来の目的を忘れてどうする。ちゃんと空は覚えていたよな楽器のこと？」

「あ、当たり前だ」

上目遣い気味で尋ねてきた澪に俺は

「いや、俺も忘れてた」なんて言えなかった。

絶対に無理でしょう？だって、上目遣いですよ上目遣い！！しかも、頬が赤くなってるんですよ！

恥ずかしそうにしてる澪って何かギュッと抱きしめたくなったりす

るんだよな……

って、俺はなにを考えて!?

ブンブンと頭を振る。

「大丈夫か？顔が真つ赤だぞ？」

「大丈夫だ！ほら、はやく楽器店に行くぞ」

楽器店――

会計を済まし、みんなを急かして楽器店に向かった。

「すごい！ギターがいっぱい」

辺りを見回してみる。

この店は初めて来たが結構品揃えが豊富な店のようだ。

例えばギターコーナーにあるツインネック。

こんなの雑誌とかでしか見たことのないぞ。

「ふう〜ん」

「ゆーい！どれがいいか決めた？」

「う〜ん…何か選ぶ基準とかあるのかな？」

「もちろんあるよ。ギターって音色はもちろん、重さやネックの形や太さもたくさんあるんだ……」

「だから、女の子はネックが細い方がいい、だろ」

「ああー！なんで先に言っちゃうだよ……」

「いや、なんとなく俺もギター説明したくなってるね」

俺に説明の締めのところを言われた澪は少し拗ねたようだ。
律が澪を弄る理由が今ならわかる…楽しいなあ〜これ。

「あつ！！このギターかわいい♪」

しかし、俺と澪の説明を唯はまったく聞いていなかったようだ。

唯が、じーっと見ているギターはギブソン・レスポール。

ギブソンって言うのはアメリカに本拠を置く楽器メーカー。主にフオークギターやエレキギターを製造している、世界でも有名な会社だ。

で、ギブソン・レスポールっていうのは、ギブソンが1952年から製造・販売を行っているエレキギター。フェンダーのストラトキヤスターと並んで、最も有名なモデルだ。

俺もこのギターを使用している。

しかし、俺のレスポールはレスポール・カスタムで唯が欲しがっているのはレスポール・スタンダードって所を間違わないように！！

フェンダーのことも説明したいがまたの機会ってことで。

以上で説明終わり！

唯がレスポールを見つめ始めて、そろそろ5分ぐらいが経つ。

ちょっと話しかけてみるか。

「これが欲しいのか？」

「うん」

即答。

「でも、そのギター、25万円もするぞ」「あ！？ほんとだ
これはさすがに手が出ないよ…」

落ち込む唯。

「あつちに安いのあるぜ」
「うん」

チラッと律の言ったギターを見る唯。

しかし、

「でも、これがいいなあ」

レスポール以外のギターには興味はさらさらないようだ。

「そういえば、私も今のベースが欲しくて、悩んで悩んで…」

その時ことを思い出している漣。

漣のことだ。一週間ちかくそのベースを見に通い続けて……

「これ、くださいっ!」

って顔を真っ赤にして言っただろう。

「私も中古のドラムセットを値切って値切って…」

同じく、その時のことを思い出す律。
律なら多分……

「もう一声、もう一声!」

と、でも言って店員さんを困らせたんだろう。

「あの店員さん、泣いてたぞ」

どうやら俺の読みは正解らしい。

「どうしてもあのドラムセットが欲しかったんだようー」

「あの一値切るって？」

さすがムギ。

お嬢様の辞書には値切るって言葉はないらしい。

「欲しいモノを手に入れるために努力と根性で負けさせることだよ」
「！」

どこぞの週間少年誌のようだな…

「すごいですねっ！！何か懂れますっ！！」

「「懂れる要素がどこに」」

見事にハモる俺と漑。

唯を見ている。

唯は俺たちのちょっとした漫才も聞こえていないようで、ずっとギターを見ている。

「あっ！？みんなでバイトしよう！」
「バイト？」

「うん！唯のギターを買うために」

「律にしてはいい案だな」
「私にしてはってなんだ！」

漑と律がいつものように言い争い始めた。

「唯、本当にこのギターが欲しいのか？」
「うん」

「なら……」

俺は財布から20万円を取り出した。

「これで足りるよな？」

「えっ！？」

「はい！？」

「なっ！？」

「空さん！！」

俺の行動に、全員が予想通りの反応をとった。

こつちも予想通り。差し出された20万円を唯は受け取ろうとはしない。

「受け取れないよっ！！こんな大金！」

「というかどうしたんだ？この20万円は？」

「なんとなく、こんな事になるかもって思って、貯金を下ろしてきてたんだ」

「なんとなくって　まるで超能力だな」

「貯金なら尚更、受け取れないよ!」

「気にするな。俺ってまったく小遣い使わねえから金が貯まりっぱなしなんだよ。だから、気にせず使ってくれ。それに……」

俺は目を瞑り、一呼吸して言った。

「今日という日が忘れられないくらい楽しかったって、明日の自分に自慢できるように精一杯、後悔をしないように今日を生きなさい」だ」

母さんが俺によく言っていた口癖。

今日、このギターを買えなかったら唯は後悔をする。

もし、みんなでバイトしてお金を貯めてこのギターを買いに来たとする。しかし、その時にはギターは他の誰かに買われいた。

そしたら必ず唯は今日という日を後悔する。

俺は唯に後悔して欲しくないんだ

「
けど」

唯は20万円とギターを交互に見る。

受け取るか、受け取らざるべかを悩んでいるのだろう。

「ホントにいいのか？」

律が心配そうに尋ねてきた。

「何が？」

「だって、20万円なんだぞ！！」

コイツは想定外の事には弱いな。

そんな律が可愛らしくて、髪をくしゃくしゃっとする。

「な、なにするんだよ！？カチューシャが外れちゃうだろ……」
「顔が真っ赤だぜ。別にいいんだよ。」

「
」

「ん？あれ？ムギは？」

先ほどまで唯の側にいたはずのムギが辺りを見回してもいなくなっていた。

「ホントだ。私は見てないけど唯はムギがどこに行ったか知らないか？」

漣がムギの一番近くにいた唯に尋ねた。

「私も知らないよ　あつ！ムギちゃん」

レジのある方向から歩いてくるムギ。

「このギター5万円で売ってくれるって」

「なっ!？」

「ま、まじで!？」

「何!？何やったの!？」

俺と唯・律はめちゃくちや驚く。

普通、驚くだろ？

25万円のギターが突然5万円だぞ！

「このお店。実はうちの系列のお店で」

「「えっ!？」」

流石に洩も驚いたようだ。

「そ、そうなんだ ありがとうムギちゃん、空くん!！」

「俺は何も」

唯は突然、俺の手を握って真っ直ぐ俺をみる。

「うっん！お金を貸してくれようとしてくれたもん！だから、ありがとう」

眩しいぐらいの笑顔。

俺は唯の笑顔に見とれてしまう。

中学の時から思ってた。唯は笑っている姿が一番可愛いって……

「顔、真っ赤だぞ？」

髪をくしゃくしゃにした時のことを根に持ってやがるのかコイツは！

「うるさい！！」

こうして、唯は5万円でギターを買うことが出来たのであった。その蔭にムギの

「もう一声！」という値切りがあったことを俺たちは知らなかったのであった。

次の日の放課後――

ちよつとした先生の頼み事で俺は遅れて部室に向かっていた。

部室に入るとアンプに繋がれたギターの音が響いていた。

「カッコいい!」

「やっとスタートだな」

「私たちの軽音部」

「ええ」

「俺は仲間外れかよ?」

「空!?!」

そこまで驚かれると俺って存在感ないのかと不安になるんだが、
さん。

「いつ来てたんですか?」

「さっき」

俺は長椅子にカバンを置いていつもの席に着く。

「気を取り直して 夢は武道館ライブ!!」

「ええ〜!?!」

唯・漑・ムギは驚いたようだ。
しかし、律は気にせず続けて

「卒業までに!!」

と、宣言する。

「え、え、ええ〜」

この発言にまた驚く漑・ムギ。

唯は、

チャラリ〜〜〜ララ〜〜〜チャラリララ〜〜〜

チャ○メラを弾いた。

25万円もするギターで弾くチャ○メラはかなりシユールで泣けてくる。

「ごめん。まだこれしか弾けない。アンプで音を鳴らすのはもう少し練習してからだね」

唯はちょっとしょんぼりしながらアンプへと向かう。

もしかして

「あつ!! あぶないっ!!」

「まてっ!! コードを抜くのは……」

「はあ?」

俺たちの話を聞く前にコードを抜く、唯。

ボンーーーー

爆音ーーーー

「アンプのボリューム下げる前にコードを抜くとそうなっちゃうんだよ……」

「あほっ」

若干、泣きそうな声で話す漣。俺も同じなんだけど。

「ハ、ハヤクイッテヨ」

カタコトなのはしょうがないな……

夢はデッサン力く武道館ライブ!!

でも、本当にこんなんでも武道館ライブを目指していいのだろうか？

まあ、頑張っていけますか！

#6 ギター！（後書き）

次回はオリジナルの話にする予定です。
感想お待ちしてます！

#7 休日！（前書き）

初めてのオリジナル

#7 休日！

けいおん！

#6 休日！

とある日曜日。

俺は、というとせつかくの日曜日を惰眠で費やすのはもったいない
と考え、いつもと変わらない時間に起きていた。

やりたいことは沢山ある。溜まってる本も読みたいし、ギターも弾
いておきたい。

まあ、何をするにも腹ごしらえ！

俺は自室のある三階から一階のリビングへと向かった。

言っていなかったがうちの家は戸建て。まあまあ、大きな家だ。

リビングー

リビングは電気がついていたが誰もいない。なので、キッチンを覗いてみる。そこにはエプロン姿の父さんが居た。どうやら朝食を作っているようだ。

とりあえず朝の挨拶。

「おはよう」

「おはようございます」

「俺の分の朝食もある？」

「もちろん。用意してますよ」

「ありがとう。まだアイツは起きてないの？」

「そう言えば」

どたどたどた――

急いで階段から降りてくる音がする。

「お…おはよう！」

「おはようございます」

「まるで怪獣が闊歩するかのような音がしてたぞ」

「私、怪獣じゃないもん！」

「はいはい」

そう言えば、まだ家族構成を話してたよな？

朝食を用意してくれたのが父さんの智春さん。

昔は高校で現国を教えていた教師だったのだが、今は小説家をしている。家事から裁縫までなんでもそつなくこなす自慢の父親だ。

そして、階段を急いで降りてきたの妹の日向。

二歳下で現在、中学二年生。

容姿は 俺がいうのもなんだが、かなり可愛いと思う。元気が取り柄で性格は素直で明るくて少々天然なところがある妹だ。

母さん？

母さんは……えっと まあーなんだ…俺が小5のときに亡くなっ
たんだよなあ

母さんはなんて言うか凄い人だった。

俺とひなが風邪をひいた時、万病に効く薬草が外国にあるという噂を聞いて急いでそれを手に入れるために外国まで行つてたっけ……

まあ それでも凄く優しくて、綺麗で、ギターとか色々な楽器が演奏できて、歌がとても上手かった自慢の母さんだ。

母さんの写真は家族が集まる場所に常に写真が飾られている。

その写真のほとんどは母さんが高校生時代にやっていたモデルの仕事で撮った雑誌の切抜きである。

母さんは亡くなってるけど、それほど寂しくはない。だって、父さんもいるし、ひなもいるからなあ。

家族構成を話してるうちに父さんが朝食をテーブルに用意してくれていた。

「いただきます」

数十分後――

「ごっつそうさん」

俺はお皿を流しに置いて部屋に戻ろうとした。

「お兄ちゃんは今日、暇なの？」

「暇じゃない。ああ、忙しい忙しい」

そう言って部屋へと再び戻ろうとする。

ひなの顔をチラツと見ると寂しそうな顔をしていた。

しゃうがねえな！

「暇だよ」

「ホント！なら、中学校まで自転車に乗せてって」
「中学校まで？」

「うん！今日は弓道部の練習があるんだ」

「了解。そろそろ行くんだろ？」

「うん。荷物取りに部屋に行くから先に玄関で待ってて」
「あいよ」

それから数分後して自宅を出発した。

うちからひなの通う中学校まで歩いて30分弱、自転車で12分程度だ。

12分っていうのは案外とはやく過ぎるもので、ほとんど会話もしないうちに目的地に到着していた。

「帰りは？」

「帰りはいいよ。練習が終わったら友達と遊びに行くから」

「わかった。じゃあ、練習頑張れよ」

「あつ！ちよつと待って、お兄ちゃん」

ひなはギュッと俺に抱きついてくる。

「ありがとね。お兄ちゃん」

「おう」

感謝の言葉をいうひなの頭を撫でてやった。

ひなはそつと離れて走って中学校の中へと入っていった。

「恥ずかしいなら抱きつかなきゃあいいのにな。さて、せっかく外に出てきたんだ。ちょっとぶらぶらするか」

本当に行く宛もなくぶらぶらとする。

ぶらぶらするにも行く所がない。まだほとんど店は閉まっている。何せまだ8時10分を過ぎた程度なのだから。

もう帰るか。

俺は家へと帰るためペダルを漕ぎ始めた。

ところが、家までもうすぐという所で俺は自転車から降りていた。

ここは公園。

俺が小さい頃よく遊んでいた場所だ。
公園には小さな子供連れの親子がちらほらいるが、やはり俺ぐらいの年のヤツはいな　くはなかった。

ベンチに見覚えのある綺麗な黒髪の美少女が座っていた。
俺は気づかれないように後ろから近づいて行き、声をかけてみた。

「なに書いてんだよ？ 漣」
「はうーーーーー!？」

漣はノートを急いで閉じて後ろを振り向いた。

めちゃくちゃノート閉じるの速かったぞ。

「そ、そ、空!？」
「おう」
「何でここに？」
「用事が終わったから家に帰ろうとして、小さい頃によく遊んだ公園を通ったから久しぶりに入ってみたんだよ。そう言う、漣は？」
「朝早く目が覚めたから散歩してたんだ」
「年寄りぼっいぞ」

「うるさい」

本当の目的は散歩ではない。俺はそう思った。
秘密はあのノートにあるはずだ！

「なあ、澪」

「なんだ？」

「そのノートは」

「何でもないっ！」

怪しい！怪しすぎるぜ！

「澪」

「うん？」

「澪って本当に可愛いよな」

「はっ！？突然、何を！？」

一瞬にして顔を真っ赤にする澪。
もう、一押し…

「いや、本当に。彼氏がないのが不思議なぐらい。世の中の男子

に困ったもんだぜ。俺ならすぐ告白してるのに」

漣は先ほどよりも顔を赤らめ、目を閉じながら話した。

「あ、その空の気持ちは凄く嬉しいよ。でも、私まだよく空のこと知らないし、もう少し時間が欲しい欲しいと言っか……」

チャンスー

俺はそう思いノートを取って中身を見てみた。

キミを見てるといつもハートDOKI DOKI

揺れる思いはマシユマロみたいにふわ ふわ

いつもがんばるキミの横顔

ずっと見ても気づかないよね

夢の中なら二人の距離縮められるのにな……

なんだこれは？ポエムか？
もしかして、歌詞なのか？

「まだ友達のまま……いたい、って何を見てるんだー！」
「零の書いたと思われるポエム　じゃなくて歌詞？」
「……………」

怒ってる。めちやくちや怒ってる。

能面みたいな笑顔を浮かべているということは。
極限を超えて激怒しているということですね。やっぱり。

「一万回死んじやええええー！！！」

思いっきり後頭部を蹴られ、顔が地面にのめり込んだ。

それから約一週間、澪がまともに口を聞いてくれなかったことは言わなくてもわかってもらえるはずだ。

教訓 あんまり澪をからかい過ぎないこと！！

#7 休日！（後書き）

漣が言った、

「一万回死んじゃえええーええー！」

は、ここ最近読み始めた作品のヒロインが時々、言うセリフです。

この作品を知ってる人いるかな？

まあ、そんなことよりも初めてのオリジナルの話。難しいですねー
やっぱり。

感想・アドバイスなどお待ちしております。

#8 特訓！（前書き）

やっと、和を登場させることが出来ました

#8 特訓！

けいおん！

#7 特訓！

とある日の放課後。

今日は珍しくいつものように放課後のティータイムを楽しむだけではなく軽音部活らしい活動を行っていた。

「ギターの弦って怖いよねー細くて硬いから、指切っちゃいそうー」

突然、唯がそんなことを言い出した。

俺もストラップをつけて肩から吊しているmYギターの弦を見ている。

確かに、女の子は恐がるかもな。簡単に切れてしまってもって。

まあ、そう言う俺も小さい頃もビビってたよなあゝ

唯の言葉に律は何か思い付いたようだ。

確実に悪戯関係だ。

何よりもあの笑みが証拠だ。

「そうだぜー、気をつけないと指がスパーーーーツと切れて血がドバーーーーツと」

「キャーーーーーーーーッ!!!!!!」

突如、俺の隣で練習をしようと準備をしていた澪が、闇夜を切り裂くとも言っのだろうかそのような悲鳴をあげ、耳を塞ぎしゃがみ込んだ。

ぶるぶると震えているを見ると、どうやら怖がっているらしい。

しかし、突然近くであんな大きな声で悲鳴をあげないでほしい。

パツと、関係ない人が見たら俺が漣にイヤラしいことをしたって勘違いされてしまう。

耳鳴りはどうすれば早く直るのか、と考えながら声をかける。

「大丈夫か？」

「い…痛い話はだめなんだ」

いや、だからってねえ。さすがに怖がり過ぎだと思つよ俺は

「大丈夫だよ。ほら、本当に血が出てる訳じゃないから」

唯はそう言つながら漣に右手を見せる。

「あはー」

漣は唯の手が切れてないことを確認し、安心したらしく立ち上がった。

「おほんっ　まあ、練習しているうちに指の先が硬くなるから血が出たりすることはないよ。ほら…」

右手を開き唯に確認させる。

いや、あのねえ。　零さん。　咳をして、先ほどのことをなかったようにしないように。

「ぶにぶに」

「あの…もういいかなあ？」

「も…もうちよつとだけ」

唯……　どんだけ気に入ったんだよ。　零の指触んの。

一応、言っておくが俺も零の指を触ってみたいとか思っていないぞ！　まじで……！

唯が零の指を触るのを止めて数分後。

各自、各々の練習に励んでいる。

しかし、唯だけは固まっていた。

「ギターを練習するって言っても一体、何から始めていいやらわからないや」

「はい」

「おう？」

漣は唯にロック・ギター入門編と書かれた本を渡した。

「とりあえず最初はコードを覚えるといいよ」

「わっ、ありがとう」

「もし、解らないところは空に聞いたらいいよ」

「俺？」

突然、俺の名前が出てきてびっくりした。

「そう。大体、コード覚えてるだろう？」

「まあ、な」

「そう言うことだから、唯。解らないことがあつたら空に聞くように」

「うん」

唯はパラパラっと本を開いて読み始める。

しかし、数分も経たないうちに俺たちの方を見て、

「さ、早速なんですけど…楽譜の読み方から教えてください」

頭から煙を出しながら言った。

「「そこから!?!」」

通学路――

「じゃあな」

「バイバイ」

「それじゃ、また明日」

「おう、また明日」

校門を出て、少し歩いた所にある信号辺りで漣と律と別れて唯と――

緒に帰る。

「えーと　CがこうでDがこう…だよね？」
「そうそう」

歩きながら、何度も何度もギターのコードを練習している唯を見て
いると微笑ましい気分になる。
何かこう言っのもいいよな。

そんなことを思いながら、ゆっくりと夕暮れのオレンジ色に染まる
帰り道を歩いていく。

「唯ーっ！！空ーっ！！」

背後から声をかけられたので、首だけを向ける。
そこには、同じく帰宅途中の和がいた。

真鍋和。

ショートカットと太枠メガネが特徴の女の子。
唯と同じく中学からの付き合いのある友人で、俺と唯のお母さんの
ポジションにいる。

「あつ！和ちゃん！」

ガッ！！

唯が元気よく手を挙げて挨拶をする。しかし、その指は見事に練習中のギターのコードになっていた。

俺は唯が真剣にやっていることがわかっていて、分、ツッコむべきなのか非常に悩んだ。

「何それ、新しいあいさつ？」

「あゝゝ気にしないくれ…」

和のツッコミを軽くあしらう。

和を含め三人で帰り道を歩いていく。

この三人で帰るのは、結構久しぶりだった。

「この三人で一緒に帰るのでって久しぶりだよな？」

どうやら唯もそう思っていたらしい。

「そうね。唯とは何度か一緒に帰ったけど、空とは高校に入って始めてよね？」

「まあな。でも、生徒会室で時々、話はしてるだろう」

「確かに」

「生徒会室？」

不思議そうに首を傾げる唯。

「和の頼みで生徒会の手伝いをしてたんだよ。何度か部室に行くの遅くなった事あっただろ。それが原因」

「そうだったんだ」

納得納得と言った表情をしている唯。

唯。お前は気づいていないのか？お前 和に生徒会の手伝いを頼まれてないって事を。

「ねえねえ、和ちゃん。今日ギターのコードを教えてもらったんだ」

今日の出来事を楽しそうに報告する唯。何か、お母さんに今日あった事を嬉しそうに話す子供のようだ。

「へーがんばってるのね。空もちゃんと頑張ってるの?」

「一応な」

「一応って ちゃんと空も頑張るなさいよ」

「へいへい」

和も和で、お母さんの受け答えをしゃがる。

やっぱり、俺と唯のお母さんのポジションだよなー和は。

「そっぴや和ちゃん。今日、帰るの遅いんだね?」

「うん。図書館で中間テストの勉強してたから」

「へえ〜」

「え!?!中間テスト!?!」

ビシッ!!

驚いて手を挙げる唯。しかし、その指は見事に練習中のギターのコードになっていた。しかも今回はDコードだ。

「……それもコード？」

また質問をする和だが、今回、俺は何も言わないことにした。

「そっかぁ…もう中間テストなのかぁ……せつかく頑張ってギター練習しようと思ったのに………」

ガツクリと落ち込む唯。

ちゃんとテストとかの日程ぐらい覚えておけよ。

「あんた、中学の時から試験勉強なんかしたことなかったじゃない」
「そっかーなら、大丈夫だね」

ピースをしながら安心したような表情の唯に俺と和は、

「いや、大丈夫じゃないから……」

声をハモらせてツッコむのであった。

テスト終了ーーーー

テストが終わったことで俺を憂鬱に誘う日々もやっと終了し、俺は音楽準備室で軽音部の仲間達とテストからの開放感を共有していた。

「うーんっ。やっとテストから開放された」

「同じく」

「高校になって急に難しくなって大変だったわ」

「そうだな……そして」

皆、今なら“どよーん”と言う効果音がめちゃくちゃ似合うであろう唯を見る。

「もつと大変そうなヤツがここに……」
「あははは」

「そんなにテスト悪かったのか？」

「ふっふっ　　クラスでただ一人…追試だそうです」

12点と書かれた数学のテストを俺たちに見せる唯。
クラスでただ一人っていうのがなんだか泣けてくる。

「……うわぁ……」

「だ、大丈夫よ！今回は勉強のしかたが悪かっただけじゃない」
「そうそう！ちよつと頑張れば追試なんて余裕余裕！！」

必死に唯のフォローをする律とムギ。
律・ムギ。唯のフォローをする必要はないぞ。多分、コイツ……

「勉強は全くしてなかったけど…」

「励ましの言葉返せコノヤロウ!!」

まったくその通りである。

「なんで勉強しなかったのさ？」

唯もいつもの席に座り、律が尋ねる。

「いやゝしようと思ったんだけど、なんか試験勉強中ってさ勉強以外のことに集中できたりしない？」

「あーそれはあるなあゝ部屋の掃除はかどったりな」

その時のことを思い出しているような律。

もしかしてコイツも勉強の合間に勉強の掃除でもしていたのかも。

「勉強の息抜きにギターの練習したら抜け出せなくなっちゃって、結局、全然勉強できなかったよ」

机に教科書を広げたまま放置して、ギターの練習をする唯が容易に想像できる。

「でもね、おかげでコードいっぱい弾けるようになったよ」
「その集中力を少しでも勉強に回せば」

律よ…みんな心の中でそう思ってる。

「そついうりっちゃんはとうたったのさ！」
「ん？あたし？」

パッパパーン！！

「余裕ですよ！この通り！」

自信満々に89点と書かれた数学のテストを見せつける律。

「こんなのりっちゃんのキャラじゃないよ……」

「た、確かに……」

律みたいなタイプは必ず頭の方は残念だと思ってたのに
驚いたよ、まったく。

「オーホホホ！私くらいの人間になると何でもそつなくこなしちゅうのよ！」

「りっちゃんは私の仲間だって信じてたのに」

「オーホホホ！オーホホホホ……」

「テストの前日に泣きついてきたのはどこの誰だっけ？」

「あっ！？バラすなよ！！！」

唯は律の肩に手を置き、

「それでこそ、りっちゃんだよ！！！」

と、めちやくちやいい顔で言った。

「赤点取ったヤツに言われたくねえー！」

俺に言わせりゃあ、どっちもどっちな気がするぞ。

「澪ちゃんとムギちゃんは何点だったの？」

向かい側にいる澪とムギに尋ねる。

「はい」

ふたりはテスト用紙を唯に渡した。

俺もふたりのテストの点に興味があるので見てみる。

律も同様に興味があったようで唯の横から見ているようだ。

「流石だな」

「うんうん」

「まあ、そんなもんだよなあ。私、ポカミスしちゃったからさー！」

必死に自分をフォローする律。

「……………」
「……………」

「頼むから何か言ってくれ」

哀れだ。

「そういえば、空はどうなんだよテストの点？」

さっきの事はなかったかのように律は尋ねてきた。

「ほいつ」

鞆から半分に折ったテスト用紙を取り出し律に渡す。

「見ないほうがいいと思うよ、りっちゃん」

唯は俺がだいたい取りうる点数を知っているので律に忠告したよう
だ。

「なっ!?!」

テスト用紙を開き固まる律。

「そんなに驚くことかよ……」

「あ、当たり前だ!!100点だぞ!100点!こんなの空のキャ
ラじゃあない!!」

ひどい言われようだ……

「俺をどんなキャラだと思ってたんだ?」

「クール気取りの赤髪ツンデレのバカキャラかな?」

プチーンー

「……………」

「ストップ！！ストップ！！早く謝れ律！死にたいのか！？」
「落ち着いて！空くん！！」

無言で律に近づいていた俺を漚とムギが必死に止める。

「えっと、あの すいませんでした！！」

律はあたふたとし、すぐに土下座をした。

「……今回は許す……だが、今度は投げるぞ……」
「はい！」

本当のところ俺の怒りは、律の土下座を見る前から治まっていた。
何でかって？

それはその 背中に何か柔らかいモノを感じて恥ずかしくなった
と言っか何というか
まあ、そんな感じでだ！

「空くんはだいたい授業で習ったことは一回で覚えるし、ちゃんと
予習復習をするからほとんどのテストは90点以上なんだよ」

みんながいつもの席に座って落ち着いてから、唯が珍しくちゃんと説明をした。

「一回で覚えるってすごいな！空」

「予習復習をしっかりとするなんて真面目なんですね」
「私も見習わないとな」

みんながやたら褒てくる。

褒められ慣れていない俺は顔を真っ赤にして、

「俺をあんまり褒めるなあー！！！」

と、言った。

何だろ せっかくテストが終わったのにめちゃくちゃ疲れた。

#9 追試！（前書き）

今回は少し長めです。

#9 追試！

けいおん！

#8 追試！

唯が12点という残念な点数のテスト用紙を返却された翌日の放課後――

俺たちはいつものように放課後のティータイムを満喫して
はいいなかった。

何故かって？

答えは簡単。

今現在、律にチヨークスリーパをかけられているアホっ子の唯が追試で合格点を取るまで部活禁止になったからだ。

「はあ」

唯。お前な菓子食いに來てる場合かよ?」

「何で?」

本当に唯は、今自分が置かれている立場が解っていないらしい。

「漑。説明頼む」

俺が説明してもよかったが、何となく説明キャラのポジションに現在いると思われる漑に任せた。

「わかった。もしも、追試で合格点を取れなかったら 退部させられるかもしれないんだぞ」

「た、退部!?!」

唯だけではなくチヨークスリーパをかけていた律も驚き、チヨークスリーパが解かれた。

なんで律も驚く？コイツも唯が置かれている立場が解っていないなかったのかよ！

「追試はいつあるの？」

そうそう。俺もそれが知りたかった。

「一週間後」

一週間――

短くも長くもない期間だが、今回はちょっと短いな。

「一週間後か……」

漣も俺と同じく、一週間の猶予について何か考えているようだ。

「そんだけあれば毎日ここに来て大丈夫だよねえ」

ドッカーンー

唯を除く俺たちはズッコケた。

「そんだけしかないの!!」

「追試に受からないと退部になるってこと解ってる?」

「そうだったよね。みんなと部活続けたいから。私、頑張る!」

本当に解ってるのか不安になってきた

追試まであと6日ー

今日のデザートはプリン・ア・ラ・モード。

プリン・ア・ラ・モードとは、細長い皿に、カスタードプディング、ホイップクリーム、アイスクリーム、フルーツを主体として、その他の甘い具を加えたデザートである。

プリン好きの俺としてはめちゃくちゃ嬉しかったりするのだが、今日はまったくと言って食う気がしない。

理由のひとつとして、

「何か唯がないと張り合いがでないな」

ものすごくプリン・ア・ラ・モードを美味しそうに食べる律の言う通り。

何か張り合いがない。こうなんて言うか

まったく阿良々木さんの名前を噛まない八九寺真宵的なの？

あーもう！とにかくツツコミを入れる相手がなくて張り合いがないのだよ！

「その割にはよく食ってるな？」

確かに。唯の分も食ってるもんな。

「それとこれとは話が違いますわん」

そう言ったものなのだろうか？

「唯…ちゃんと勉強してるかな」

そして、これが最大の理由。

漣の言う通りでちゃんと勉強をしているのだからって事。

俺の勘では、多分、唯は 勉強をしていないはず。

一応、勉強をしようと試みるがごちゃごちゃになった机などを掃除して、漣が貸したギターの入門書で見つけ、ギターの練習をし続け、気が付いたら夜中の1時を過ぎていて風呂にでも入ってから寝たはずだ。

ああ…残りの日もこんな風に過ごさなければいいけど。

追試まであと3日ー

今日のお菓子はカステラ。

カステラとは、卵を十分に泡立てて小麦粉、砂糖もしくは、水飴を混ぜ合わせた生地を、正方形から長方形の大きな型に流し込んで、オーブンで焼いた後に棹型に切った焼き菓子だ。

ここ最近、俺はまったく紅茶のお茶請けとなるお菓子・デザートを食べてはいない。

「唯…勉強進んでるはずだよな？」

「うんゝ進んでるかな？」

俺たちと同様に律も唯の分のカステラを食べるのを止め、考え始める。

「あははーうふふーうふふー」

と、言いながらベッドの上でゴロゴロと転がりながら漫画を読み、お菓子を食べる唯の姿が思い浮かんだ。

「やっぱ 心配になってきた」
「同じく」

「今晚、みんなで励ましのメールをしてあげるのはどう？」

「おう！名案だな！」

「うん。私もやってみるよ」

「勉強の邪魔にならなきゃいいんだけどな」

その日の夜。

俺も一応、励ましのメールを送った。

内容は、

『勉強頑張れ。

追試受かったらアイスでも奢ってやる。』

と、書いたのであった。

追試前日――

「というわけで湊ちゃん助けて――!!」

どういわけ何だろうか？

まあ、だいたい解る気がするが……

「えっ！？勉強してきたんじゃないの？」

「出来なかった……」

「えー！？」

定位置の席に座っていた律が思い切り立ち上がった。

「合格点取れなかったら唯ちゃんが」
「それだけは！！」

嫌なら、ちゃんと勉強してこいよなあ…

「うーん…今晚は特訓だ！」
「本当！？」
「零に教えてもらえば確実に合格点取れるぞ」
「いや」

照れる零。

教えてもらっているだけあってよく解ってるんだな律は。

「うまんいだせ！！一夜漬け教えるの！！」
「うおーい！！普通に教えるよ」

「ぷっ……はっはははー!!」

「笑うなー!!」

律の予想外の言葉に爆笑する俺に顔を赤くしながら澪はツッコミを入れた。

唯の家で勉強会を開くことになり、俺たちは唯の家へと歩いて向かっていた。

「今日はお父さんが出張でね。お母さんも付き添いでいないから気兼ねしないでいいよ」

「あれっ？妹がいるって言ってなかった？」

「うん。妹は帰って来てると思う」

「それだとお邪魔にならないかしら？」

（（唯ちゃんの妹か））

恐らく、漣・律・ムギは唯妹を唯そつくりだと考えているな？

俺は何度か和と一緒に唯の家に行ったことあるから唯妹とは面識がある。

あれは……まあ、会えばわかるか。

平沢家――

「みんな上がって上がって」

「「「おじやまし――す」「」」

「おお」

律は平沢家を見て驚いた様だ。

平沢家はかなりお洒落な感じで、俺もついつい眺めてしまう。

「あつ！お姉ちゃんお帰り〜あれ？お友達？」

「はじめまして。妹の憂です。姉がお世話になってます」

お辞儀をする唯妹。 もとい、平沢憂。

唯と同じぐらいの長さの髪をポニーテールみたいしている。唯同様に美少女である。

「……………」

「スリッパをどうぞ」

漣たちがポカーンとしているうちに憂は人数分のスリッパを用意してくれた。

漣たちも俺が憂に一番始めに会った時と同じく、

（（出来た子だー！！）（））

と、思っているはずだ。

「久しぶりだな。憂」

「はい！お久しぶりです。空さん」

憂に最後に会ったのは去年の12月。
久しぶりと言っても変ではないだろう。

「相変わらず憂は出来た子だよな」

「そんな事ないですよ。普通です普通」

普通か？いや、普通じゃあない。

頑張っても憂みたいには俺は出来る気がしないぞ。

「何してるの空くん？早く来なよ」

俺と憂が話してる間に、自分の部屋へと俺を除くみんなを案内し終えた唯が呼んでいるようだ。

「わかった！今行く！」

憂に一言ほど言って唯の部屋へと向かった。

唯の部屋――

部屋に入ると唯たちはテーブルの周りに座っていた。各自の座っている場所はこんな感じ、

律

澪机紬

唯

困った。俺はどこに座ればいいんだ？

そんな事を悩んでいるとムギが少し唯の方に寄ってくれた。

俺はムギの所に座ろうとするが、漑もムギと同じく唯の方に寄ってくれていた。

どうしたらいいのだろうか……マジで…

またまた悩みかけたが、ムギが始めに寄ってくれていたのだからと考え、ムギの横に座った。

それからすぐ後に、憂がお茶とせんべいなどのお茶請けを持ってきてくれ、また漑たちは、

（（（本当に出来た子だー）））

と思っていたようだった。

「憂ちゃんは今何年生？」

「中三です」

「受験生ですね」

「はい」

あのー楽しい会話はよろしいのですが、まだ唯に勉強を教えなくてもいいのでしょうか？

「どこ受けるかもう決めてる？」

「うーん 出来れば桜ヶ丘に行きたいんですけど私の学力で行けるかどうか」

「お姉ちゃんも受かったんだから大丈夫だよ」

「そうだな。それに律も受かってるし」

「そうそう。私も って、何だと！」

「ナイスノリツツコミですね！」

ムギが感心したように言った。

漣は俺たちのミニコントを無視し、憂に尋ねる。

「お姉ちゃんに勉強教えてもらえばいいんじゃない？」

漣 それはいくら何でも無茶な提案だ。

俺たちはつくづくそう思ったのであった。

あれから数十分後――

やっと勉強会が開かれた。漑がメインで勉強を教え、俺とムギがそのサポート、律は　主に勉強の邪魔をしていた。

あまりにも律が邪魔ばかりするため、俺と漑で鉄拳制裁を加え、唯の部屋から追い出してやった。

「ふう　ダメだ　集中力が続かない」

「おいおい、まだ始めて30分しか経ってないぞ」

「しょうがないって。唯の集中力の限界は30分だ。何か甘いもので食ったら復活するけどな……」

「それなら　ケーキ持ってきてるから、あとで食べよう。だから、もう少し頑張って？」

流石だ……ムギ……

ちゃんと唯のやる気を持続させる食べ物を用意しているとは…

唯はムギの話を聞き、やる気が出たようでもの凄いスピードで問題を解いていった。

もう少し（１５分）頑張った後、部屋の前で正座をさせていた律を部屋に呼び戻し、ケーキを食べることにした。

ケーキを食べている際、チャイムの鳴る音が聞こえ、誰か来たのだからか？と考えていると扉が開き、バスケットを持った和が入ってきた。

「あつ、和ちゃん！」

「和？」

「どう？はかどってる？」

「うん。おかげさまで」

どうやら、和は唯の勉強がはかどってるか気になって来たようだ。

唯のもうひとりの母親みたいな和の事だ心配だったんだろう。

「皆さんが軽音楽部の？」

和はテーブルの方に振り向き、俺と唯に尋ねた。

「そうだ」

「紹介するね。こちらが秋山澪ちゃん。で、田井中律ちゃんに琴吹紬ちゃん」

「「「よろしくー」」」

紹介された3人は一緒に挨拶をした。

「真鍋和です。唯とは家が近所で幼なじみなんだけど、高校でも同じクラスになりました。空とは中学一年からの付き合いです」

「幼稚園からほとんど一緒なんだよ」

「不思議な縁よね」

「なんか、年寄りばっかいぞ。和」

「うるさい。それより、ほら。サンドイッチ作ってきたわよ」

あのバスストにはサンドイッチが入ってたのか。

「おーちょうどお腹減ってたところ」
「俺も」

「今、ケーキ食べてたじゃん…」
「ケーキでは腹は膨れん」

「全然、オツケー！出して出して〜ごっつあんです」

サンドイッチを食べいると何故だが、中学校のアルバムを開き、中学生の頃の話と和がし始めた。

「中学の時、私が熱を出してしばらく休んでたんだけど毎日、唯がプリントを持ってきてくれたんだよね」

「わたし風邪ひいたことなくて」

サンドイッチを食べながら喋る唯。

食べながら喋るな。

それと何とかは風邪をひかないは本当だったんだな。

「でもね、そのプリントの中に唯のテストが間違って入ってて……」

10点と書かれた数学のテストか……
そんな事もあったな。あの時は英語も20点とかじゃなかったけ……

「「「「「あははは。あははは」「」「」」

唯と憂以外は、あまりにも変わらない唯の点数に笑った。
憂は唯と同じく、恥ずかしそうに俯いていた。

「変わってないな」

「でも、本当に助かったんだよ」
「あへへえ」

唯は少し照れながら笑った。

「空にも感謝してるのよ」

「俺、何かしたっけ？」

「空は、私が熱を出してしばらく休んだ時、休んで受けられなかった授業のノートを貸してくれたじゃない」

「それぐらい普通だろ。俺も風邪とかで休んだ時は、和にノート貸してもらってただろう？」

「確かにそうね。でも、空から借りたノートには、黒板に書かれた事だけじゃなくて分かり易い図とか例とかも書いてくれたわよね？あれって私の為に書いてくれてたんでしょ？」

「そ、そんな訳あるか！お前の為じゃなくて自分の為に書いたんだよ。勘違いするな！」

「ツンデレ」

小さな声でボソッと律が言った。

「ツンデレ言うなっ！」

言っておくが、俺は絶対ツンデレではない！
ただちょっと照れ屋なだけだ！

「…そういえば、律も中学の時」

漣は中学の頃を思い出したようだった。

「ゆ、言うなよっ！」

律は俺たちに聞かせたくないようで、必死に話を止めさせようとしている。

これはチャンスだ。

俺をツンデレといったこと後悔させたる！

「なになに」

「是非とも聞きたい」

「実はね。律たらさ」

それから俺たちはみんなの中学生の頃の話で盛り上がってしまい気付けば20時を過ぎていた。

その後、和を含めて22時過ぎまで唯に勉強を教えて各自帰宅した。

何だか勉強した時間より休憩時間の方が長かったが、唯は追試を合格できるのだろうか？

追試当日――

追試は放課後に行われ、答案用紙は追試終了後すぐに返却される。

俺たちは部室で答案用紙を持ってやって来る唯を待っていた。

漣は落ち着かないように歩き回っているし、ムギはムギで上の空でカップに紅茶を入れ続けている。律は今日のデザートチーズケーキを食べ、俺は父さんの書いた小説を読んでいる。

このふたりに比べれば俺と律は随分落ち着いているものだ。

「合格点取れてるかな 唯」

漣は歩き回るのを止め、心配そうに言った。

「あれだけ勉強したから大丈夫のはず」

ムギは紅茶を入れ続けるのを止め、零れた紅茶を布巾で拭きながらそう応えていると、

ガチャッー

と、扉が開く音がした。

みんな扉の方を見てみると、真っ白になった唯の姿があった。

「ど、どうだった？」

澪が一番先に唯に結果を尋ねた。

「どうしよう……澪ちゃん……」
「えっ　　また駄目だった？」

カタカタと震えながら唯は、

「ひゃ、100点取っちゃった」

100点と書かれた答案用紙を見せながらそう言った。

「極端な子っ!!」

漣が言ったことはまさに俺・律・ムギも思ったことであつた。

記念ということで100点の答案用紙を持った唯を漣はカメラで撮つた。

「でも、良かった。とりあえずこれで一段落だな」
「そうだねー」

「みんなのおかげだよ。本当にありがとう」

「いやゝゝそれほどでも」

「お前は何もしていない!!」「」

俺と漣はハモリながら律にツツコミをいれた。

最近、律がボケて俺と漣がツツコミをするのが当たり前になってきたな。

「じゃあ、早速練習しましょう」

久しぶりの練習だなゝ

「試験勉強中にもコードの練習をしたってことだし、ちょっと弾いてみてよ」

「えへへ。バッチリだからXでもYでもなんでもござれゝ」

唯はそう言いつつギターにストラップを付け、ギターを肩から吊した。

「「「うん?」「」」

みんな唯の言った、X・Yという不思議ワードが気になっているらしい。

なんだ?そのコード?俺は知らんぞ。

漣 俺を見ても不思議ワードについて何も答えられないぞ。

「えっと それじゃあ、C・Am7・Dm7・G7って弾いて
みて」

「ほいほい」

唯は自信満々に弾こうとするが……

「 」

「どうしたの?」

何か嫌な気が……

「わすれた」

「「「「だぁー」」」」」

ズッコケた

「ずっと×とかyとか勉強してたから」
「また1から!!」

忘れてた
唯はひとつの事を真剣に取り組めば、ほぼ完璧にその事をやってのけるのだが、ひとつの事を覚えると先に覚えた事をすっかり忘れるんだ。

現に

「澪ちゃんこれがXだよ！」

「そんなの無いってば！！！」

「ええー！」

チャラリーーララーチャラリララー

「それは弾けるんかい！！」

ああ、また1から教えないといけないのか

まあ、頑張って教えていきますか！

#9 追試！（後書き）

オリジナルをそろそろ入れる予定なのですが、このキャラと空を絡ませて欲しいとかなどのリクエストがありましたらどんどん連絡フォーム・感想板に書いてください！
よろしく願います。

#10 合宿！（前書き）

ついに、合宿編突入です！

10 合宿！

けいおん！

9 合宿！

一面広がる青い海――

潮の香り――

今、俺たち軽音部は海にいる。

何故、俺たち軽音部が海にいるのかを語るには数週間前まで遡らなければならぬ。

数週間前――

俺と唯・律は、珍しく時間になっても来ない漣とムギを待たずに練習を開始していた。

「うっ　えっと　」

Fコードを押さえようとする唯。
なんか指が震えているような気がするのだが。

グギー

「あつ！？ゆび」

「本当に忘れたんだな」

「……だな……」

久しく、コードを押さえる練習をやっていないと指が吊ることがあるのだがまさに唯はその状態だった。

「えへへ。お祖母ちゃんによく褒められたんだ。 “唯はひとつ覚えと他のことは全部忘れちゃう” って」

「それ多分違うぞ」

「言っておくが、それ褒められてないからな！」

唯の祖母さんは、ちゃんと唯の事的確に解ってるのな。

ガチャン——

思いきり部室である音楽準備室のドアが開いた。

ドアの方を見てみると漑がいた。

どうやら思いっきりドアを開けたのは漑のようだ。

「あっ！漑ちゃん！」

「どこ行ってたんだ？」

漑は何も言わずに机の所まで行って、

「合宿をします！！」

と、ビシッと指を俺たちに指しながらそう告げた。

「合宿？」

「そう！もうすぐ夏休みだし！」

「もしかして海？それとも山とか？」

「遊びに行くんじゃないやありません！バンドの強化合宿。朝から晩までみっちり練習するの！」

突然だな。昨日まで一言もそんな事言っていなかったのに。

「わあー着ていく服買わなきゃ」

「水着も買わないとな」

「聞けーっ！！」

やはりと言っべきか、唯と律はまったく澪の話聞いてはいなかった。遊びに行く気満々だな

「夏休みが終わったら、もうすぐ学園祭でしょう」

とりあえず開け放しのドアを閉じて、みんなが席についてから話を始める澪。

「学園祭……」

「そう。桜高祭での軽音部のライブって言えば昔は有名だったんだぞ。それなのに」

ひとり熱く語る漣だが、唯と律は話を聞かずに何かを考えているようだった。

俺はよく昔のことを知っているんだなと感心していた。

「学園祭……」

「高校の学園祭って凄いいんでしょう?」

「模擬店」

「焼きそば」

「たこ焼き」

「あははは」「」

ふたりともめちゃくちゃ学園祭を楽しみにしているようだ。

「はいはい!!!私、メイド喫茶がやりたい」

「ええー！お化け屋敷がいいよ」

もう既に出し物を考えたようだ。しかも、まったく軽音部とは関係のないモノばかりを。
なんと言うべきかコイツらは

「メイド喫茶！」

イラ

「お化け屋敷！」

イライラ

「メイド喫茶！！」

イライライラ

「お化け屋敷！！」

「もうっ！絶対メイド喫茶の方が……」

ブッチー

ドッカンーー

澪は律に俺は唯に思いつきりゲンコツを喰らわした。

「何で私だけ たんこぶが出来るほどやられないといけないの

」

「痛い」

「私たちは軽音部でしょう！！ライブやるの！！」

その通りである。

ガチャツーー

「ごめんなさい。遅れちゃって」

漣とは対照的に普通にドアを開けて入ってきたムギ。
ムギは正座をさせられている唯・律を見て、

「マドレーヌ食べる？」

と、尋ねた。
ふたりは、

「……うん……」

と、ハモって答えたのであった。

ムギが来たことで机の上には紅茶とマドレーヌが用意された。

「まあ……」

ムギにとりあえずさっきまでの話をしておいた。

「ムギはどう思う？いくら慌てずやっていこうって言っても、もう3ヶ月になるのに一度も合わせたことないなんて」

確かに一度も俺たちは合わせたことがない。
何故かって？それはそのティータイムやらで時間を費やし過ぎたからな。

「まあまあまあまあまあ」

「6回」

まあを言った数だな。何を数えてるんだ唯は。

「行きましょう！是非！みんなでお泊まり行くの夢だったの♪」

「そうなんだ」

「じゃあ、海にする？それとも」

「だから！バンドの強化合宿って言ってるだろう」

まったく律は話を聞いていないのな。

「あつ！？でも、いくらぐらいかかるのかな？」

「確かにそうだな。金銭面に問題があるな」

「キツくないか？」

「それは」

ムギの方を向く遷。

ムギに聞きたいことはなんとなく分かる。

「む、ムギ」

「はい？」

「別荘とか…」

「ありますよ」

即答！？

「あの 聞きたい事があるのだが」

俺は恐る恐る漣に質問を試みた。

「なんだ？」

「もしかして、俺も合宿に行かないといけないのか？」

「当たり前じゃないか！」

漣は力強くそう言った。

あ、当たり前！？

「あ、あのー皆さん、分かってらっしゃいますか？俺は男ですよー
ー若い男女が保護者もなしに合宿だなんて」

「大丈夫です！」

ムギが力強くそう答えた。

「ムギさん 何を根拠におっしゃられてるのでしょうか？」
「私、信じてますから！空くんの事」

信じてますからって

「それに私 空くんになら / / / /」

きやあー

何を言っちゃってるのこのお嬢様は！？

「そ、それなら わ、私も / / / /」

遷まで!？

「わ、私だって / / / /」

遂には律まで!？

「何が空くんにならなの?」

唯はまったく意味が分かっていないようだ。

「唯 お前はお前のままでずっとそのままできてくれ
」

切にそう思う

「うん。わかったよ」

「「「空^{くん}つ！」」」

唯とそんな話をしていると律たちは声を八もらせながら俺を呼んだ。

「は、はい!？」

なんだ!？このプレッシャーは！

「「「合宿行くよね?」」」

「は、はい 是非とも行かせていただきます」

俺はこの3人のなんとも言えない威圧感により、合宿参加を決めました。

俺はなんて弱くて薄いんだ

合宿当日――

唯が寝坊をして、電車に乗り遅れかけると言うハプニングがあったが

それは何とか、俺が集合場所である駅まで乗ってきていた自転車で急いで唯を迎えに行き、ものの数分で女子特有のやたら大きなカバンと唯を駅まで連れてくるという荒技でなんとか切り抜けた。

そのためか、俺は電車での移動中はすっかり爆睡だった。

ムギの別荘に到着した俺たち（ムギを除く）は驚いていた。

「でっけえーっ！」

そうあまりにもムギの別荘が大きかったから。

「本当はもつと広い所に泊まりたかったんだけど…一番小さい所しか借りられなかったの」

「一番小さい　これで
「嘘だろ」

まだ他にも別荘があるってことにも驚きだが、この目の前にあるバ力でかい建物を小さいと言ったムギにも驚きだよ…ホント

ずっと外で驚いてばかりいる訳にもいかないのでムギ曰く、一番小さな別荘に入った。

玄関から入ってすぐの所の扉を開けてみるとそこは居間？と思われる場所だった。

「うおー」

「うわあ〜広い」

律・唯を先頭に俺も居間？と思われる部屋に入った。

「うん？これは…」

俺の後に入ってきた澪は部屋の中心あたりある机の上の果物の盛り合わせのようなモノが気になったようだ。

俺も気になっていた。

「あつ！ごめんなさい。何もしておかなくていいって言っておいたんだけど」

「ここはなんだ！」

律と唯は俺たちを差し置いて別荘内を探索しているようだ。

「お姫様ベッド！」

少しお姫様ベッドなるモノが気になって律たちの所に行ってみると天蓋付きベッドがあった。

こりゃあ、確かにお姫様ベッドだな。おい

次に律たちが向かったのはキッチンだった。

「でりゃあー！」

掛け声とともに冷蔵庫を開ける律。

冷蔵庫の中を見てみるとそこには、高級なお肉があった。

「「うおー」」

「うまそう」

「これは料理が楽しみの品だな」

「いつもなるべく普通にしたいって言ってるんだけど、なかなか分かってもらえなくて」

「しょうがないと思うぞ、多分。普通って言うのがだいたい難しいんだよ」

スタジオへと向かいながら俺とムギはそんな話をした。

ガチャッ——

「どつぞ」

扉を開けるとそこには立派なスタジオがあった。

「うわぁ〜」

「しばらく使ってないから、ちゃんと動くか心配だけど」

漣は近くにあったアンプを確認して、

「うん。大丈夫そう」

と、言った。

良かった良かった。これでももしもアンプが故障してたら、俺と漣と唯は何にも出来ないからな。

「あれ？唯と律は？」

「途中でいなくなっちゃったけど」

「しょうがないヤツらだな…」

がさごと漑はボストンバックから古いラジカセを取り出した。

「なーに？」

「ああ。これ？」

漑はカチャッとラジカセの再生ボタンを押した。

「昔の軽音部の学園祭でのライブ……この前、部室で見つけたんだ」

「上手」

確かに上手い　でも

「私たちより相当上手い……」

漑は悔しそうに呟く。

本当に悔しそうに。

「…うん」

「何か聞いてたら、負けたくないなって」

「それで合宿って言い出したのね」

「納得」

「うん」

漣は小さな声でそう答えた。

「でも」

ムギが言いたいことが何となく分かった俺は、ムギ先にこう言った。

「負けない　俺たちなら　と、言うか俺は負けてない！顔も知らん先輩なんぞに！！」

「 空 」

「 空くん 」

ガチャンーーーー！！

思いっきりスタジオの扉を開けて入ってきたのは水着姿の律と唯であつた。

「 よーし、遊ぶぞーー！！ 」

「 オーイエイーーーー！！ 」

俺が珍しく格好良く決めているのにこのふたりは……

「 って、はやっ！！練習は？ 」

「 先に行つてゐるから3人とも急いでねー 」

そう言い残し唯たちは海に向かっていった。

「これでも？」

「早まったかも　な　」

「えっと　多分そんなことは　」

ムギよ…フローはいらん……

「おーいー！！」

「早くー！ー！！」

どうやらふたりは玄関で俺たちを待っているようだ。

「ちょっと、待ってー！　漣ちゃん、空くん行こう？」

「えっ！？　ムギ行くつもり？」

「せっかくだし。少しぐらいなら…ねえ？」

「えっ……でも、私は……」

漣は悩んでいるようだ。

俺はこのうちに退散させてもらおう。
まだ、寝たりんからな。

「ムギ、空行くぞー！ー！」

「はい！ーじゃあ、待ってるから。空くん行くよー」

漣にそう告げるとムギは俺の手を取り引っ張っていく。

逃走失敗

ひとりになり、寂しいのか少し涙目になりながら、

「わたしも行くーっ！」

と、言いながら水着をカバンから探す漣をスタジオの入り口で俺たちは見ていた。

ホント　いい性格してるよ　コイツら

回想終了ー

#11 海！（前書き）

サブタイを考えるのって難しいですよね！

1 1 海！

けいおん！

1 0 海！

浜辺――

そこには、ゴムボートに紐をくくりつけて、その紐を引っ張りながら歩く唯と木の棒を杖代わりにして歩く律の姿があった。

「無人島にたどり着いて、かれこれ2週間か…」

「ながされた時はどうなるかと思ったけどな」

「でも、何かこれはこれで楽しいよね」

「ふふふ あっ 大物発見」

流されて浜辺に上がっていた海藻を拾い上げる律。

「助かった」

「ごつつあんです」

「何かつての設定作ってるんだ」

勘違いをした人はいないと思うが、俺たち軽音部は現在、ムギの別荘の近くにあるプライベートビーチにいる。間違っても流されて無人島なんぞにはいないから安心して欲しい。

「あっ……………」

漣の胸を見て、ショックのあまり手に持っていた海藻を落とす律。

「漣ちゃん……」

唯も同様にショックを受けているようだ。

「うん？」

二人の視線を感じ、自分の胸を見る漣。

効果音は、

ポイン---

で、おかしくないだろう。

「くらえーっ!!」

ゴムボートの中に置いてあったビーチボールを手に取り、怒りを込めて澪の顔面目掛けて投げる律。

「へぶっ!!」

思いつき顔面に当たったが大丈夫だろうか。

「唯泳ぐぞ!」

「うん!」

胸の発育が少しばかり遅れている唯と律は、そう言って海へ泳ぎに行った。

「いたい」

「…大丈夫か?」

「うん。それにしても綺麗な所だな」

そう言って、漣はこの風景を写真に収めた。

「だな。来て良かったな」

「ああ」

「そう言ってもらえて嬉しいです」

「ムギ？」

気が付くとムギが俺の横に立っていた。
まったく気配がなかったのだが

「はい。飲み物はどうですか？」

ビーチパラソルの下に置いていたクーラーボックスから取ってきた
と思われる数本の缶ジュースを俺たちに見せ、尋ねる。

「サンキュー。俺は炭酸」

「私は… オレンジジュース」
「どうぞ」

それぞれ缶ジュースを開けて飲み始める。

俺はなるべく海の方だけを見ようとする。

理由は、同学年の女子の中でも1、2を争おうであろうスタイル抜群の漑とムギがサイドにいるからだ。

漑の水着は黒のビキニ、ムギは白のビキニ。

ついでに言っておくと俺はボクサータイプのパンツという平均的な男子の水着姿だ。

二人とも惜しげもなくそのスタイルを見せ付けている気がする。

いかん 目のやり場に困る

「遅しいんですね」
「はい!？」

突然、ムギは何故だかうつとりしながらそう言う。

「確かに」

漣は顔を赤らめながら言う。

「そうかな？」

「ええ！！」

瘦身にしなやかな筋肉をまとうていて、意外に厚みのある胸筋が素晴らしいです！」

えらく力説された
自分では普通だと思っただけど

「何かスポーツでもやってたのか？」

「特には ああ…剣道って言うか剣術を少しカジってたぐらい」
「剣術？」

不思議そうに聞いてくる澤。
しょうがないよな。今はほとんど教えられてないからな

「これは師匠から教えてもらったんだけど　剣術って言うのは、
古武道の1つでな、日本の刀剣である刀で相手を殺傷する武術なん
だそうだと、言っても刀なんて使わず木刀を使っただけだな」

「へえ　　すごいんだな」

「すごくなてないよ。基礎しか習ってないんだ。師匠が旅に出ち
まっ　て…」

「旅に!？」

とにかく掴めない人だった。まるで宇宙人のようだったな……

「さて、ジュースも飲んだし、泳ぎに行こう」

「ああ　ムギ？」

一向に動かないムギ。
よく見てみると、

「空くんが 剣術を うふふふ」

と、言いながらめちゃくちゃうつとりしていた。何故だ？

なんとか元に戻ったムギを含め、俺たち軽音部はとにかく遊んだ。

例えば、唯を頭以外埋め、唯を中心にナスカの地上絵モドキを書いた。あれは、あまりにも間抜けすぎて爆笑した。

他には砂のお城を作った。これはムギが異常に凝って永久に保存してもいいぐらの出来に仕上げた。

漣を先頭に岩場の方に行った時、漣が手を置いた場所がフジツボでびっしりだったらしく

もの凄いスピードで向かい側へと行き、

「怖くない怖くない怖くない」

と、何度も何度も言っていると、後ろからついて行った律が、

「お医者さんに行くと膝の皿にフジツボがびっしりと」

と、驚かしていたので、

「止める！可哀想だろうが！」

と、言いつつ律にゲンコツを喰らわした。

そんな様子をムギと唯は笑って見ていた。

そんな感じで、遊んでいると夕方になっていた。

俺とムギはビーチパラソル近くに腰を下ろし、

「ふうー海水飲んだ〜」

「たどり着いたぞ！黄金の島ジパング！！」

唯と律はそう言いながら砂浜に寝転んだ。

「まだまだ」

澪はどこからかスイカを持って来た。

「せっかく海に来たんだから、思う存分遊ばないところまで来た意味が」

海を見る俺たち。

「あーっ！練習！」

「忘れてたのかよ」

珍しくツッコむ律。

「ま、全く　律が遊ぼうとか言うからだぞ」

カタコトに話す漣。

こついった漣を見るのは初めてだな。

「一番楽しそうに遊んでたのは誰だ」

確かに。そうだな

夜――

夕飯は俺が担当した。

言ってなかったが意外に俺は料理が出来る。

父さんが出来て、俺が出来ないってのは悔しかったから必死になつて練習をして料理を覚えた。

前菜は俺が持参した野菜などで作ったサラダやスープ。メインは冷蔵庫に入ってた高級であろうお肉を使った肉料理。

ちょうどパンを焼くための材料も器具もあつたので焼いた。

今日の夕飯のメニューはこんな感じである。

みんなに、美味しいって言ってもらえて……そのなんだ　嬉しかった

夕食後――

俺たちは今回の合宿の本来の目的であるバンドの練習をするためスタジオにいる。

「お腹いっぱい」

「床が冷たくて気持ちよい。こうやって、目を閉じると何か波に流されて感じるよね」

「ああ…本当だ」

「「お休みなさい」」

唯と律はスタジオで寝転がっている。
遊び疲れ、お腹もいっぱいになり、眠たくなったようだ。

俺も出来れば唯や律のように寝転がっていたい。

「始めるぞ！」

「二人とも起きて！」

漣とムギは何とか二人を起こそうと声をかけるが二人はまったく起きない。

「ムギ、ちょっと退いてて。空は手伝って」

「あいよ」

俺と漣はコードを挿したままのアンプを二人の頭の方に置いた。
俺は唯の近く。漣は律の近く。

「「せーの」「

ジャンー！！！！

確実に目が覚めたな。これで。

「なあ。もう今日はやめにしようぜー」

「練習が目的でここに来たの!!」

しかし、漑よ……お前も昼間はさっぱり練習の事を忘れてたのではないか…

「それはそうだけどさ」

「そう言えば律 最近、ちょっと太ったんじゃないか？」

「えっ」

「特にお腹まわりの所とか」

「えっ!?!」

「最近、ドラム叩いてないからかな？」

律は漑の言葉を聞いて服を少しめくって

「フギヤー!!!ウギヤー!!!」

と、奇声を発し泣きながらドラムをやけ気味に叩く。

俺には律が太ったようには見えんないが

一応、律もそんなこと気にするんだなと少し驚きだ。

て、言うか策士だな。 澪は。

「もう、ギター持てない…」

「ええー！ー！」

今度は唯か…

「だって、このギター重いんだもん！」

「だから、軽いやつにしておけて言ったのに…」

「誰だ！！このギター買うつて言ったのは！！！」

俺は、ワガママを言う唯の頭に優しく手を置き、こう言った。

「…………潰すよ…………」

「スイマセン　私が買うつて言いました」

すると、ガタガタと震えながら唯は自分の問いに自分で答えたのであった。

「しゃーねえな…ちょっとだけ休憩しようぜ。いいだろ、漣？」
「しょうがないな」

漣は、渋々了承してくれた。

「「やったー！」」

唯と律はそう言つとまた寝転った。

十分後――

「そろそろ、床温まってきたね」

「…ああ」

そう言い終えると二人はゴロゴロと転がり始めた。

「汚れるわよ」

ムギは気が付いてないようだが、この別荘はかなり綺麗に掃除してある。俺たちが泊まりにくる前に、かなり高い掃除スキルを有した人達が掃除してくれたのだろう。

「ひんやりだ」

二人はひんやりとした場所で寝転がっている。

「そんなに学園祭どうするつもりだよ？」

「だから、メイド喫茶がいいって言ってんだろっ」

「お化け屋敷だよ」

まだ諦めてないのかコイツら。

「ふう　唯　お前何にも分かってない　漣を見てみる」

二人は起き上がって漣を見る。

「な、何よ…急に…」

「漣ほどメイド服姿が似合うヤツなかないぞ」

俺は想像してみた……

想像中――

想像中――

「
/
/
/
/
/
」

ヤバイ……確かにめちゃくちゃ似合う！

「可愛いかも」

「なんてな、じょうだ……」

ドッカーンーーー！！

漣は顔を真つ赤にしたまま、今まで一番の威力であろう鉄拳を律に叩き込んだ。

こりゃあ、死んだかも

律の復活を待つこと20分。

復活した律に唯はお化け屋敷の良さを説明し始める。

「確かにメイド喫茶もいいけど、やっぱりお化け屋敷だよ！だって、空くんが」

言うな！唯！それ以上は

「『吸血鬼』と『雪女』をやってくれるんだよ！！」

やるかー！！

そう あれは中3の時の学園祭。

俺たちのクラスはお化け屋敷をやった。お化け役はクジ引きで決めたんだっけ

お化け役に決まった俺は、中学生最後って事でクラスみんなの願いを聞き、一人で『吸血鬼』と『雪女』をやる事にした。

あの時の俺はどうかしてたんだ……

朝のうちは、裾がミニスカぐらいの丈しかない白装束とマフラーを着用した『雪女』。

昼からは、燕尾服にシルクハットを被り、襟の立った表が黒で裏が赤のマントを羽織った『吸血鬼』をやったんだ。

学園祭終了後、クラスの男子のほとんどが“『雪女』の格好で卒業までいてくれないか”、って言ったのは今でも忘れられない

俺の黒歴史……

「マジで！」

「私、見たいです！」

「ライブはしたいが 私も空の『吸血鬼』と『雪女』も見たい
」

律さん……誰もやるなんて言ってますよ……

ムギさん……うっとりとしながら言わない……

漣さん……ライブをしましょうライブを……

なんだろうね 予想通り食いついてきたよ。
さらっと、流して欲しいんです 俺は

それから、30分弱……みんなが冷静になるのに要した。

俺たちはスタジオから出て外にいる。

それは、律とムギと唯が俺と遷に見せたいモノがあると言ったからだ。

「終わったら本当に練習するからな」

「分かってるって」

「うん」

「「せーの!」「」」

バーン――

ライブとかよく使われる立火仕掛と思われる仕掛け花火が噴出する。

唯は立火仕掛？の前で、

「それじゃあ、最後の曲行くぜー！」

と、言いながらギターを弾き始める。

楽しそうにー

本当に楽しそうにー

花火に負けないぐらいのキラキラ輝く笑顔でー

俺はただただ見とれてしまった。

終わらないで欲しいー

永遠に続いて欲しいー

時が止まってしまえばいいのに、なんて……思ってしまった…

パンパンー

その音とともに最後の曲は終わったー

「オーイエオーイエー！って、あれ！？もう、終わり？」

時間に表すと数分程度の出来事だったのだろう。唯はまだまだ弾き足りないって感じた。

「予算がなあ」

「いつかまた」

「そうだな！武道館公演で派手にバババーン！！、っと」

「武道館？」

「おいおい。目標はそこだって決めただろ？なあ！」

「へっ！？」

漣は俺と同じで見とれてしまっていたようだ。
だから、俺が代わりに、

「ああ 絶対に行くぞ武道館！！」

と、言った。

「「「うんっ！」「」「」

その時、俺は何かみんなの心がひとつになった気がしたんだ。

突然、聞き覚えのある音楽が流れ始める。

俺は、音の発信源……零の持つラジカセを見た。

「武道館目指すなら、まずこれぐらい出来なきゃな」

「上手いな」

「でも、この曲……」

『オマエラが来るのを待っていた!!』

へビメタ!?

『ドリアアーーーー!!』

うわぁ!?

突然、何の前触れもなく発せられた叫び声に驚いた。

カチャーーーー

「これって？」

「テープがB面に変わったようね」

「そのようだな」

「なんだ」

「聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない」

漣はどうやらさっきの叫び声が怖かったらしく、小さくなっている。

「フジツボ」

「うわぁー」

「膝の皿屋敷」

怖がる漣に追い討ちをかける律。
何だ？膝の皿屋敷って？

「いやだーいやだぁーいやぁ」

漣は泣きながら四つん這いで少し移動し、体育座りで大泣きを始めた。

「りっちゃん！」

「やり過ぎだよ」

「謝っておけよ」

「ごめん。あー悪かったな、漣」

流石に自分でもやり過ぎたと思ったらしく謝る律。

「漣ちゃん、大丈夫だから」

「お化け何かじゃないわ」

2人に慰められてもなかなか泣き止まない漣。

しょうがない…あれをやるか……

俺は決心すると体育座りをして大泣きをする漣に近づき、後ろからギュッと抱きしめた。

「……大丈夫だから、もう泣くな……」

「……う、うん……／＼／＼」

後ろから抱きしめているため顔は確認出来ないが、どうやら泣き止んでくれた様なので俺は抱きしめるのを止めた。

ふう　泣き止んでくれたか

ひながまだ小さかった時、どうしても泣き止んでくれなかった時はギョツと抱きしめたら必ず泣き止んでくれたから、もしかしたらと漣にも効果があるかもって思ったたらビンゴだったな。

「「空^{くん}」」

……殺気！！

突然、背中に冷たい感覚が

勇気を振り絞って、ゆっくり振り返る。

「どうして、突然、澪ちゃんを抱きしめたのかな？かな？」

「ねえーワケを教えてよ？」

ムギさんも律さんもなんか『
が“なく”か“なかない”頃に
的なキャラぽっいぞ！』

ヤバいな 何を言ってもバッドエンド行きぽっいぞ

こういった時は

三十六計、逃げるに如かず！！

「お休み——！」

「「ちょっと、まっ……」」

ムギと律の静止の言葉も聞かず、急いで宛がわれた自分の部屋（勿論、一人部屋）へと逃げ帰った。

それから一時間後、湯上がりの溼が俺の部屋に来て、

「私たちは、もうお風呂に入ったから入っていいよ」

と、教えに来てくれた。

どうして、ムギと律が追いかけて来なかったのか、と尋ねたら、

あの後、唯がさっき聞いた曲をほぼ完璧に弾きこなして私たちを驚かし、一緒に露天風呂に入浴したら、いつの間にか機嫌が良くなっただようでもう大丈夫。

と、答えた。

その後、澪は唯たちの待つ部屋へと戻っていった。

俺は澪が帰って露天風呂に入って、すぐ寝た。

今日は疲れた……

よく眠れ……そう……だ……

#12 星空！（前書き）

久しぶりのオリジナル！

#12 星空！

けいおん！

#11 星空！

草木も眠る丑三つ時とは、概ね午前2時から2時半を指すことを
存じであるうか？

まあ、知っていて知らなくてもどっちでも構わないのだが

そんな時刻に俺は目が覚めてしまっていた。

電車で爆睡してしまったためか、それとも俺に宛がわれた部屋のベ
ッド この天蓋付きのベッドに慣れてないためか

考えてしょうがない。

「…よつと」

掛け声とともにベッドから身体を起こす。

うん。昼間の疲れからくる倦怠感も眠気もまったくないようだ。

とりあえず携帯だけ持って部屋を出た。

静かに静かにとある場所からとある物を取ってから、キッチンに向かい、冷蔵庫から昼間に入れて冷やしておいた500mlペットボトルのお茶を取り出す。

そして、物音ひとつ立てないように細心の注意を払いながら別荘を後にした。

さすが、草木も眠る丑三つ時。

周りの草木も虫なども寝ているように静かだ。

静寂――

まるでこの世界には俺一人しかいないみたいじゃないか
と
いうのいくらなんでも大袈裟だろう。

しかし、今この瞬間だけは、この場所は俺の物と言っただけなら罰は
当たらないはずだ。

夜空を見上げる　そこには幾千万の星々、見事な満月があった。
その淡い月のヒカりは海へと続く道を照らしている。
俺は月の淡いヒカりに照らされた道を進み、海へ向う。

波の音が聞こえてくる。どうやら海までもうすぐのようだ。

昼間見た時とはまったく違う海がそこにあった。
夜の海は全てを呑み込んでしまいそうな感じがする。
しかし、嫌な感じではない。むしろ、懐かしささへ感じる。

こういった感覚的なものを説明するには、俺みたいなヤツには荷が重すぎるようだ。

だから、こういったモノが得意なヤツに説明は任せるとしよう。

俺は波打ち際あたりに腰を下ろし、微妙に温くなったお茶を開ける。

暗く深く揺らぐ海、夜空に輝く星々と満月を眺めながらお茶を飲む。もし、この風景を見ながら飲む未成年お断りのジューズは乙なものではないかと思ひながら。

さて、お茶を飲んで喉も潤った事だし……やりますか。

俺は500mlのお茶と一緒に持ってきたモノをケースから出す。

俺がとある場所から持ってきたモノ

それは スタジオに置いてあったアコースティックギターだ。

アコースティックギター。略称、アコギ。
軽くアコギの説明をしておこう。

アコースティックギターとは、ギターの中でも、かなり古典的で、
楽器から直接音声を得るものである。

指で弾くフィンガー・ピッキング、またはピックで弾くピック奏法
の2種類の演奏方法がある。

弦の振動から生じる音波は楽器本体内の空洞の共鳴を経て奏者や聴
客の耳へ届くってワケだ。

説明終わり！

よし。チューニングも終えたし、弾きますか！

ケースに入ってたピックを手に取り、アコースティックギター
を弾き始める。

♪~~~~~

♪~~~~~

満月の空の下、響き渡るアコースティックギターの音色。

波の音が伴奏になり、かなり良い感じた……

ギターを弾くのを止める。携帯を見て、時間を確認する。20分程度は弾いていたようだ。

今日は、いつもより上手く弾けたな。このアコースティックギターのおかげかな…

ギターは出来るだけ毎日寝る前に、欠かさずに弾くようにしている。

そう言えばいつからだっただけ

「空くん」

「わっ!？」

突然、背後からかけられた声に俺はかなり驚いた。

少しでも剣術を習った俺が気配を感じ取れなかったのだ……

「む、ムギか　こんな時間にどうした？」

「なかなか、寝付けなくて少し浜辺を歩きに來たの。隣、いいですか」

「どうぞ」

ムギは、思ったより俺の近くに腰を下ろした。

何か良い香りがするんですけど！

「わ、悪い。勝手にギター借りて海まで持ってきてちゃって…」

「いいんですよ。ただ置いてあるだけで、誰も弾いてあげてなかったから」

「そうだったのか」

結構、しっかりと手入れされてるから、てっきり大事なギターだと思っただが…

「えっと、その」

じっと、海を見つめるムギ。

暗く深く揺らぐ海、星々と満月の輝く夜空。

静かすぎる…！

もともと、ムギはおとなしい子なのは分かっているが今のムギは更におとなしい気がする！

「空くん　少し聞いてもいいですか？」

「えっ？別にいいけど」

「」

ムギは、いったいどうしたんだ？改まって？

「あの曲　最後に弾いてた曲。なんて言う曲なんですか？」

「聞いてたのかよ！？」

「はい。声をかけようと思ったんですけど、楽しそうに弾いてたから」

「そっか」

まさか聞かれてたとは……

「えっと、最後に弾いてた　あゝあの曲！あれはオリジナルの曲で曲名はないんだ」

「曲名つけないんですか？」

「つけない」

「そう ですか」

あまりにも即答だったためか、ムギは驚いているようだ。

「突然、どうしたんだ？ そんな事聞いて？」

「あの曲は空くんにとって大切な曲な気がしたから、少し気になつて」

驚いた

ムギは、一回聞いただけで気がついたのか

「さっき言ったことを訂正する つけない、じゃなくて つけられないんだ」

「えっ？」

「あの曲はさ 母さんが作った曲なんだ」

「空くんのギターの先生だった、って言うお母様が？」

「そう」

「でも、何でそれが“つけない”じゃなくて“つけられない”に係するんですか？」

「えっと それは」

「話しにくいことなら、私」

ムギは、言いにくい事だと思ったようだ。

「いや！そんなことはないんだけど　すうゝはあゝ」

俺は軽く深呼吸をし、話始める。

「この曲は、母さんが亡くなるちょっと前に作ったんだ。つけようと思えば、つけられるんだけどさ　何故か駄目なんだ」

「う」　「ごめんなさい！私　知らなくて！！」

ポロポロと涙を流し始めるムギ。

俺は、あたふたとしながらムギを慰める。

「泣くことないって！父さんも妹もいるから寂しくないんだって！それに、唯や律や漑、それにムギ。軽音部のみんながいるから大丈夫！」

「後、俺はムギの泣き顔よりも笑った顔を見てたいんだ。だって、笑ったムギが好きだから」

自分が何言ってるか、ほとんど解らんがとにかく涙を止める為に必死に慰める。

「ほ 本当にですか？」

「ホントホント！！」

何とか泣き止んでくれたムギ。

ふう　ホント女の子の涙ほど見たくないものはないな。

あれ？ちよつと待て。さっき俺、何て言った　好きって言った？

いやいや！落ち着け、俺。あの好きは、泣き顔よりも笑った顔が好きって事で、告白ではないよな！！

「あ、あの？ムギさん？」

ムギを見してみる。

「好き　空くんが　好きって
」

超うっとりしてる！
やばい　これはやばいぞ

「そ、それじゃあ。お休み、ムギ」

今回も三十六計、逃げるに如かず作戦を実行するが、首根っこを掴まれ敢えなく失敗――

「この合宿が終わったら、お父様とお母様と会食の予定があるんです！その時に私と空くんの婚約の話を――」

ムギが、一人超特急で突っ走っている最中、俺はムギを冷静にするのに要する時間を考える。

最低2時間
最長4時間

このままじゃ、寝る時間が

琴吹 紬 s i d e e r r

空くんが『何故か駄目なんだ 』って言った時の表情が、泣き顔に私には見えたんです。

そんな空くんを見た私は、何故だか泣いてしまいました。
もしかしたら、泣かない空くんの代わりに私が泣いたのかもしれ
ません

私は、空くんが好き

いつか、あなたの心を癒してあげたい。

でも、今は あなたの“好き”って言葉でトリップする事を許し
てください♪

#12 星空！（後書き）

やっぱり、オリジナルは難しい！

他の作者さんも同じなのでしょう？

それはさておき合宿編は、もう1・2話続く予定です。

どうぞお付き合いよろしくお願いします。

#13 ラッキー！（前書き）

今回もオリジナル！
そして、合宿編完結です。

#13 ラッキー！

けいおん！

#12 ラッキー！

主人公は、ラッキーである！

まさにその通り。大体の主人公には、初めっからアビリティにラッキーが備わっているのだ。

この小説……『桜高軽音部！』の主人公、福間空も例外ではなかったと、今回のお話で理解していた戴くこととなる。

合宿2日目――

合宿2日目は、昨日の反省&澁の必死の説得により午前中から練習をすることとなった。

確かに、昨日の練習は遊び疲れと唯・律の邪魔でほとんど出来ていない。

今日は、頑張りますか！

ギターケースから相棒のレスポール・カスタム（グロスブラック・色のボディ・多層バインディング・ゴールドハードウェアなどの豪華な外觀により“ブラックビューティー”の愛称で呼ばれる）相棒を取り出し、チューニングを始める。

特に問題はないようだ。

軽く慣らす為に、ここ最近のお気に入りの曲を弾き始める。

チラッその他のメンバー達の様子を窺う。

どうやら各自それぞれウォーミングアップを始めたようだ。

10分程、ウォーミングアップをした俺たちは、とりあえず『翼をください』を演奏する事にした。

演奏が始まる……

俺と唯が、入部したその日に漣たちが演奏してくれた曲。

何かみんなでこの曲を演奏する日が来るとは……何か感慨深いものがあるな。

それにしてもいい感じだよな。このメンバーで演奏すると。

相変わらず律のドラムは走り気味だし、漣は律につられて少し走り気味だ。ムギは相変わらず上手いし、唯は少々ミスはあるが中々ものだ。

はつきり言って、武道館ライブなんてまだまだ夢物語。

けど……いつか、このメンバーならって思えるんだよな。

演奏が終わり、俺たちは感想を言い合い始めた。

「中々、良かったよな？」

「うんうん。良かったよ」

「そうですね」

「確かに。けど、律。相変わらず走り気味だぞ！空はどう思う？」

漣がさっきの演奏の出来を尋ねてきた。

「確かに良かった。けど、さ。俺たちならまだまだ出来るはずだ」

俺は咄嗟にそんなキザッぽいことを言ってしまった。

「そうだね。確かに私たちなら」

漣は頷きならそう言う。

俺は少し恥ずかくなったので大きな声で、

「あの曲”を演奏するぞ!”」

と、言った。

あの曲とは……俺と漣。それにムギと一緒に作曲をしている曲だ。多分、学園祭でのライブで演奏する曲になると思う。

それから、俺たちは昼過ぎまで学園祭のライブで演奏すると思われる曲を練習した。

その後、唯と律が“お腹が空いて力が出ない”と言い出した。お腹も減ったし、疲れたし、ちょうど時間もいいので俺たちは休憩にする事にした。

朝食は溲やムギに作ってもらったので昼食は、俺が作る事にした。

今日の昼食はカルボナーラ！

せっかくだから少し豪勢に作ってみるか。

普段、自分が食べると思ったら具はベーコンくらのものだけど、今回はマッシュルームやタマネギも加えるか。

タマネギは薄切りに。

マッシュルームは石突きを落とすし、キノコ類は洗うのはあまりよくないので、濡れた布巾で丁寧に汚れを落とす。

フライパンにオリーブオイルを回し、熱くなったところでベーコンを投入。

タマネギとマッシュルームを加え、ついでに白ワインを入れちゃったりして。

その間に寸胴鍋ではパスタを茹でている。一本味見してみると、まだ少し芯が残っているようだ。

フライパンに今度は生クリーム。一煮立ちしたら塩と粗挽き胡椒をさっと振りかける。

火を止め、湯切りしたパスタをソースに手際良く絡める。

そして最後に、余熱を利用して卵黄を絡めた。

ここで火を通してしまうと、卵がボソボソになってしまい、あのトロツとした食感が台無しになってしまうので注意。

これで完成だ！

結構、自信作のカルボナーラはみんなに大好評であった。

昼食を食べた俺たちは居間でまったりとしている。

漣たち女子は雑談を始めた。ホント女子と言うのはおしゃべりが好きな生き物だ。

俺はそんなこと思いながら、ウトウトとしていた。

眠い……

今朝方の疲れが今頃になって来たよ……

あれから、4時間かけてムギを何とか妄想の世界からもとの世界に帰って来させた。

そのためほとんど寝てないんだよな……

まさか、朝日を浜辺で見ることになるなんて誰が思うよ……

いかん……いよいよ睡魔が……

それから、もの2分で俺は寝てしまった。

――

「うん」

どうやら、俺は睡魔に負けて寝てしまっていたようだ。
ゆっくり目を開ける。

暗い。

俺はズボンのポケットに入れてある携帯を取り出し、時間を確認して見る。19時を過ぎている。

どんだけ疲れてたんだ。俺は。

とりあえず辺りを見回してみる。

誰もいない。

俺は誰が掛けてくれたか分からないタオルケットを畳み、居間を後にした。

俺は自分の部屋に行き、着替えを取り、風呂場へと向かった。

寝汗で気持ちが悪く、さっぱりしたかったのだ。

風呂場に唯たちがいないかをしっかりと確認する。
どうやらないようだ。

俺は安心して、脱衣場にある籠に衣服を入れ、浴場の扉を開け、入る。

昨日と同じ。相変わらず見事で立派な露天風呂である。

檜木製と思われる桶で肩などからお湯をかけて、軽く汚れや汗を洗い流して、体と頭をさつさと洗い湯舟に身体を沈める。
ゆっくり足を延ばし、素晴らしい景色を眺める。

この露天風呂に入れば1日の疲れなんかすぐに取れるな。

俺はそう思いながらこの露天風呂を楽しんでいると

ガチャッ——

不吉な音　浴場の扉が開く音がした。

誰だ！俺が入ってるって言うのに浴場に入ってきて来たの！？

「ふうゝ今日も疲れ　た　」

入って来たのは、長い黒髪を結い上げ、タオルを身体に巻いた漣であつた。
漣はすぐに俺に気づき固まつた。

「ど、どうも　」

一応、挨拶を試みた。

「キャ　　キャー　　ウウッ　　」

闇夜を切り裂く悲鳴を上げられる前に俺は一瞬の内に、漑の背後に移動し、右手で漑の口を塞ぐ。

風呂の中でも、タオルを巻いてたおかげですぐに動けたぜ

「漑　お願いだから落ち着け。落ち着いたのなら首を上下に動かせ」

2分ほど経ってからだろうか、漑はゆっくりと首を上下に動かした。俺は、口を塞いでいた右手を外す。

「ぶっはあ」

「悪い。いきなり口塞いで」

「それはいいんだけど　何で空がお風呂に」

「それはこっちの台詞だ。俺が入ってたの気が付かなかったのか？」

「まったく。脱衣場に電気ついてなかったから」

電気つけんの忘れた……

それにしてもこの光景を律たちに見られたらやばくないか？
いや、絶対にヤバイ！

「今更なのだが漑よ…律たちは今どこに？」

「律たちなら居間にいるはずだけど」

「そうか。なら、今、脱衣場には誰もいないって訳だ　俺は、出るからゆっくりと立派な露天風呂を楽しんで」

俺は、急いで脱衣場へと向かうと……

「ま、待って　私が入って来ちゃったからちゃんとお風呂に入れなかったでしょ？　だから　その　一緒に入れば？」

漑は、顔をこれでもかといったぐらい真っ赤にし脱衣場へと向かうとする俺の手を掴みながら、そう言った。

漣はあれか？俺を男として見てないのか？

「いや！それはいくらなんでも」
「背中合わせに入れば大丈夫！」

結局、俺は断る事ができず背中合わせに風呂に入る事にした。

シーン

なんか嫌な静けさだ。
とりあえずなんか喋るか

「えっと 俺が寝ている間何やってんだ？」

「律が海で遊びたいって言い出て、昨日と同じく海で遊んでたんだ！」

「そ、そうか！俺も起こしてくれればよかったのに…」

「起こそうと思ったんだけどよく寝てたから。一応、風邪引かないようにタオルケットはかけてたけど邪魔だったかな？」

タオルケットをかけてくれたのは漣だったのか。

「邪魔なんかじゃねえよ　ありがとう、漣」

俺はボソッとお礼を言った。

「　　うん　　」

また静かになった。

けど、今度の静けさは嫌な感じじゃなかった。

むしろ、いつまでもこのまま感じていたとさえ思えるほどだった。

しかし、そんな幸せは長くは続かないもので

「なあ、空」

「うん？」

「私って、あまり胸ないだろ？」

「いやいや！かなり立派だろう。さっき…確認…した……」

あれ？これって……

「 やっぱり見てたのか」

振り返って澪の様子をうかがう。

あゝ笑顔だ。百点満点の笑顔だ

「二兆回死ねーーーーっ!!それと、責任取って私をお、およ……
やっぱり言えないよーーーーっ!!」

そう言いながら、漣は思いっきり脳天に鉄拳を叩き込んだ。

漣さん……

二兆回って……

それとお、およって何……

ガクッー

これが俺の合宿の最後の記憶……

目を覚ましたときには、既に家にいた。

どうやって、俺は帰って来たのだろうか？ 謎だ？

#13 ラッキー！（後書き）

次からは夏休み編です！

次回は、和をメインにした話が、律をメインにした話のどちらかです。

まだ、オリジナルの話が数話続きますがお付き合いください！

#14 夏の日！（前書き）

久しぶりの投稿です！

季節性インフルエンザで軽く死にかけてました……

今回は夏休みのある日のお話です。

#14 夏の日！

けいおん！

#14 夏の日！

桜高軽音部夏期合宿が終わって早一週間。

ここしばらく、部活もななかつたため唯たちとは顔を合わせていない。

俺は、この一週間“とある作業”に没頭しているめ昼夜逆転の生活を送っていた。

そんなある日のこと

俺はいつものように昼間まで情眠を貪るつもりだったのだが、一本の電話が俺から情眠を奪い去った。

ベット近くにあるテーブルの上に置いてあった携帯電話が着信音をがなり立てる。

俺はゆっくりとした動作で携帯を取って、表示されている電話の主を確認してみる。

そこには、

『秋山 澪』

そう表示されていた。

それを見た俺はさっさと通話ボタンを押した。

『今日ヒマだよね!』

それが、一週間ぶりに聞いた澪の声だった。

『13時に駅前に来て！それじゃ！』

と、言って、あっさり切りやがった。

俺一言も喋ってないのだが　ってか何であんなに必死だったんだ。あと、俺が今日ヒマだと何で解るんだ。これでも俺は忙しい。とにかく忙しい。やりたい事、やらないといけない事がいっぱいあるのに

「しょうがねえな」

ここ最近、一歩も家から出てないし。まあ、今日ぐらい付き合ってやるか。

俺はめちゃくちゃ暑い自室から出て、シャワーを浴びるため風呂場へと向かった。

その途中、アブラゼミの大合唱が聞こえ、今日も暑くなるかもと思った。

12時45分――

五分前行動ならぬ十五分前行動を実行し、集合場所である駅前に来てみるとそこには既に漣が来ていた。

「待たせたかな？」

俺より先に来てるなんて驚いた

「だいじょうぶ。私も今来たところだから空とそれ程変わらないよ」
「そうか…」

俺はそう言ってから、いつもと違う出で立ちの漑を見る。

学校では下ろしているストレートの髪を、ポニーテイル風に結わえている。

そして、私服はいつもの大人しめの感じではなく、どこぞのガハラさんが着ていた、別に露出が多いわけでもないのに、妙に胸が強調された上半身のコーディネートが特徴の私服を着ていた。

「へ、変かな？」

不安そうに漑が訊いてきた。

「全然、変じゃない！似合ってると思う」
「そ、そうかな／＼／＼」

顔を真っ赤にする漑。

相変わらず褒められるとすぐに顔を真っ赤にするやつだな。

「そ、そろそろ出発しよう」

「待て。まだ他のヤツらが来てないけど」

「言い忘れてたけど、律たちには連絡してないから」

「えっ！？それじゃ、今日は俺と漑の二人だけで遊びに行くってのか？」

「そうだけど 私とじゃあ嫌？」

目を潤ませ、伺うように漑が俺を見つめる。

う

なんて凶悪な破壊力を持ってやがる！

「い、嫌ではないけど」

嫌ではない嫌ではないが、二人でって まるでデート

今、絶対に俺、顔真っ赤だ

「えつと　それじゃあ、行こうか？」
「うん」

俺たちは、特に目的地を決めずに街をブラブラして行く事にした。

はじめに、俺たちが行ったのは唯のギターを買った楽器店。あの、ツインネックのギターなどがあつたあの品揃えが豊富な店である。

「見て、見て、空！レフティ専用のベースがいっぱい」

「嬉しそうだな　」

そりゃあ、仕方ないか
レフティ専用の楽器は珍しいからな

それにしても

「て、店員さん！ここにある全部ください！！」

テンション高っ！

「くらこら、落ち着け」

テンション高めの澪を落ち着かせようとしたが、この状態の澪を見るのは珍しいから放っておく事にした。

15分が過ぎたが澪は相変わらずレフティ専用のベースを眺め続けていた。

「そろそろ他の所に行こうぜ？」

「やだ」

即答かよ！

「ずっと此処にいるつもりか？」
「いる」

まるで子供だな

「じゃあねな。ほら行くぞ」

漣の腕を掴み引つ張っていく。

「ちょっと、空！まだ、私ここにいる」
「はいはい。次、ワガママ言ったらその口、キスでもして閉ざすぞ」

この台詞がどうやら効果があったようで漣は次の場所へ行くまで静かであった。

次に行ったのはファンシーショップ。

「これ、絶対空に似合っつて！」

澪が差し出してきたのは、ネコミミならぬキツネミミであった。

「こんなの似合っつてたまるか!!！」

「まあまあ、そう言わずに着けてみてよ」

「嫌だ!!断固拒否する!!！」

「お願い。着けて？」

目を潤ませ、上目遣い気味に澪は俺を見つめる。

なんて破壊力なんだ！

こんなのされたら絶対に断れない

「もう　好きにしてください」
「やった♪」

そう言つて澪は楽しそうにキツネミミを着け、さらにキツネの尻尾を模様したアクセサリーをも装着した。

全身を映すことが可能な大きな鏡を覗き込むと、何とも情けない姿の俺がそこにあつた。

「似合つてるよ♪」
「似合つてなんかない!!」

最悪だ…獣耳なんぞ着けないといけないなんて……

やっぱ、やられ放つてのは性に合わないよな！

「なゝ漣…お前も着けてみないか獣耳？」

「いやゝ私は……」

「問答無用！」

俺は近くにあつたイヌミミ、革製のチョーカー（なんか犬用の首輪ぽつい）、そのチョーカーに取り付ける事が可能なリードを漣に着ける。

完成！秋山漣犬型仕様！！

「は、恥ずかしいよ／＼／＼」

「似合ってる！凄く似合ってる！！」

恥ずかしさ所為が軽く涙目な漣。

何か今の漣を見てたらイジメたくなるよなゝ

「なあ、漣。わんって鳴いてくれないか？」

「い、嫌だ！絶対に嫌だ！」

「そんな事言わずにお願い」

軽くリードを引っ張りつつ頼んでみる。

「……………わ、わん……………／／／／」

漣は顔をこれでもかと赤くしながら、小さな声でわんと鳴いてくれた。

や…ヤバい……………めっちゃくちゃ可愛い!!

このままお持ちか……………って、何考えてるんだ、俺は!?

落ち着け、落ち着けー

「こ、これでよかったのか? わんって鳴いてみたけど…」

「あ、ああ。良かった、最高だった!!」

あつ、今日の記念に漣が今着けてるやつプレゼントするよ」

「いや、私は……………」

「すみません、彼女が着けているやつが欲しいんですけど?」

「はい、わかりました。では、レジまでご案内します」

手早く澪に着けたれたキツネミミなどを外して、レジへと向かった。

今更ながら、今日の記念がイヌミミとかったのは如何なものか……

そんな日常生活で何一つ役に立ちそうに無いプレゼントであったが、澪は案外喜んでくれた。

その後、ゲームセンターやら色々な所に行き、気が付けば空がオレンジ色の夕日に染まっている。

俺たちは集合場所であった駅前に戻って来ていた。

「今日はその……急に誘って迷惑じゃなかった？」

澪は不安そうに訊いてきた。
だから、俺は……

「迷惑なんかじゃねえよ。本当に迷惑に思ってたら俺は来ねえよ」

と、答えた。

「そうか、よかった……」

漣はホツとしたような表情をした。
そんなに気になってたのか……

「今度は……その……俺から誘ってもいいか？」

「それって……」

「い、言っておくが、デートとかじゃないからな！！結構、今日楽しかったら、また二人で遊ぶのもいいかもって思っただけで……」

「わかってる。デートじゃないって事は」

何だか余裕のある漣。

何故か俺はそんな涙に負けたような気がして……

「帰る！」

そう言って逃げるように家へ――

「待つて！途中まで一緒に帰ろうよ？」
「断る！！！」

何で、素直に……って言えないかな……

#15 顧問！（前書き）

今回から原作――

15 顧問！

けいおん！

14 顧問！

一般的に学校で行われる二大イベントと言えば、体育祭&学園祭である。

もちろん、桜高でも同じである。

そう言えば我が校、桜高でも夏休みが終わってすぐに体育祭が実施された。

競技の合間に行われるクラブ対抗リレーなるエキシビジョンマッチに軽音部もエントリーするなど律が言い出した時には、律はなかなか冗談のセンスがあるな、と思ったが、残念ながらそれは冗談で

はなかった。

本当に我が軽音部はクラブ対抗リレーに参加し、軽音部のメンバーでバトンリレーして陸上部などの運動部をぶっちぎって一番にゴールテープを切ってしまった。

誰が予想しただろうか？文化部である軽音部が一位になると……そして、第三走者であるムギが疾風のように走ると……

そんな忘れたくても忘れられない体育祭も終わり、一週間、現在、私立桜が丘高等学校は桜高祭と名を変えた学園祭の準備に追われている。

勿論、軽音部も――

今日もティータイムより先に桜高祭で演奏するオリジナル曲の練習をしている。

「あいてっ――！」

「どうした？」

「指の皮、むけちつた……」

そう言つて、唯は皮の剥けた指を俺たちに見せてきた。

「うわぁ…痛々しい」

「確かに」

「ほら、澪ちゃんも見て〜」

わざわざ見せるようなモノじゃないだろうが……

あれ？返事がない？

まさか……

「見えない、聞こえない、見えない、聞こえない」

澪はそう呟きながら、ブルブルと震え、耳を塞ぎしゃがみ込んでいた。

やっぱりか〜

「はーん？」

また、何か律はよからぬ事を思いついたようだな。

「うわぁーっ！！私もドラムの練習のし過ぎで手のマメつぶれちゃったーっ！！」

可哀想な漑……

ビビった漑は律のいいオモチャだな。

「りっちゃん、絆創膏とか持ってない？」

「アイツがそんなの持つてるはずないだろう？」

「うん。そうだね」

しょうがねえな。保健室に行って絆創膏貰ってきてやるか。

「ごめんねーちょっと、譜面台を……」

音楽室側のドアが開き、そこから山中さわ子先生が入ってきた。

「あら？」

山中先生は、唯の指の皮が剥けている事に気が付いたようだ。

「指の治療をしてあげるから職員室に来てくれる？」

指の治療をしてもらったために職員室へ。

俺は唯の付き添いと言うことで……

「痛ー！うゝ消毒染みたー」

「はいはい。指、そのまま固定しててね」

「はい」

付き添いと言っても特にする事もなく、ヒマな俺は山中先生の机を見ていた。

なんとも綺麗な机だ。

「はい、これでいいわよ」

「ありがとうございます」

どうやら、治療は終わったようだな。
さて、部室へ帰るか……

「どれどれ」

山中先生は唯の中指を触って、

「まだまだね。この分じゃ、またすぐ皮むけるわよ?」

そう言った。

「ええ」

「そうやって何度やってる中に皮が硬くなって、弾けるようになる

の。誰が通る道よ?」

「空くんもそうだったの?」

「ああ、もちろん」

ギター始めた頃は、俺もよく皮が剥けたもんな。

「って、あれ?先生、ギターやってたんですか?」

俺もそれ気になった。

「うんうん。昔、友達がね」

本当かな?

指を触って初心者か分かる素人って……

「あつ、お疲れ様です」

「お疲れ様です」

山中先生は職員室に戻ってきた先生に挨拶をし、席から立った。

「じゃあね」

「はい」

「先生、お茶いかがですか？」
「ああ、どうも」

席から立ったのは、お茶を淹れてあげるためか。
いい先生だな。

「ほれ、部室に戻るぞ」

「うん…あつ、ムギちゃん！」

「えっ!？」

職員室を覗き込んでいるムギがいた。

何してるんだ？

ムギも加え、部室である音楽準備室へと戻っていく――

「ムギちゅん、どうかしたの？」

「えっ、いえ！綺麗だったなって、思ってた……」

綺麗？山中先生の事か？

それならムギも十分、綺麗だと俺は思うが。

「あゝさわ子先生ね。それよりどこに行ってたの？」

「あつ、うん。澪ちゃんに言われて学園祭のステージを借りるための申請に行ってたんだけど……軽音部はまだちゃんとしたクラブって認められてないって、断られちゃった」

「あゝそっかゝ」

「へえ――マジで……」

うん？

「「へっ！？」」

見事に俺と唯の声がハモった。

「部として認められてないだつて!!」

部室に戻って来た俺たちは、律にムギから聞いた話をそのまま話していた。

「うん…そうみたい」

「部員が4人集まったら大丈夫じゃなかったの？」

「そのはずなんだけどなあ」

「うーん」

部として認められていない理由を考え始める、律・唯・ムギ。

俺は何となくであるが理由に見当がついていた。

「っていつか…クラブって認められてなかったのに……」

俺たちはムギが持ち込んだティーセットを見る。

「音楽室、好き放題使ってよかったのかな？」

唯にしては珍しく鋭いな…

「い、今まで何も言われなかったから大丈夫だよ……きっと…」
「絶対、大丈夫じゃないだろ」

「そ、それよりどう言う理由なのかを聞きにいかないとな」

あつ、無視した。

「そうねえ」

「あれ？そついや漑は？」

「ああ、漑ちゃんならあそこでまだ怯えてる」

「帰ってこーい!!」

自分がビビらせたのによく言うな。

俺・唯・ムギ・律は、怯えている澪を部室に残し、生徒会室に部として認められていない理由を聞きに行くことにした。

「頼もう!」

「部長は私!」

唯と律は騒がしく、俺とムギは普通に生徒会室に入った。

「あら?唯と空」

「和ちゃん!」

生徒会室には和ひとりしかいないようだ。

「ええ、和ちゃんが何でここに？」

「何でって…生徒会だからだけど」

「ええ！？凄いな、さすが和ちゃんだよ！！」

確か、和が生徒会に入ってるって話は唯も聞いてるはずなんだが……
忘れているようだな。

「お前ら、本当に幼なじみ？」

俺もよく訊きたくなる。本当に幼なじみかって…

「うーん。やっぱり、リストにはないわね」

和にもう一度、部活リストを確かめてもらったが、やはりリストには軽音部はないようだ。

「もしかして……」

何だ？突然、シリアスな感じになったぞ！

「りっちゃん、何か心当たりが？」

「うん。おそらくこれは弱小部を廃部に追い込むための生徒会の陰謀！！」

そんなアホな話があるか！！

「和ちゃんは本当は心が綺麗な子！目を覚まして！！」

って、唯は律の話を信じてるよ！？

「何の話？って、言いか部活申請紙が出てないんじゃないの？」

「部活申請紙？」

「そんな話は聞いてないぞ！」

「聞いてるだろ！！」

開け放しの生徒会室のドアの前に、黒炎を纏った零がいた。

めちゃくちゃ怖いですよ、澪さん。

「そう、あれはまだ春のこと……」

律が突然、語り出した！

「私が部長だから私が書く！」

部活申請用紙をいつもの席で書くところする律。

「大丈夫か？」

「あの〜パウンドケーキ持ってきたんだけど」

「あはーっ！！食べようぜ」

「おい、律！」

「わかってるよ。食べ終わったらすぐ書くって」

食べ終わったらすぐ書くってー

すぐ書くってー

そして、今もいつも律が使用しているの机の中に書きかけの部活申請用紙があると、さあ……

「やっぱり、部活申請用紙の出し忘れが原因だったのか！！ 漑は、右の頬を、俺は左を！」それを聞いた漑は頷いて、律の右の頬を引っ張り出した。

「やっぱり、お前のせいかなぁ！！」

「まあまあ、漑ちゃん、空くん。りっちゃんも悪気があったわけじゃないし」

「ムギは甘いんだ！」

「まあまあまあ」

「しょうがないわね。私が何とかしてあげるわ」

「」「」「本当！？」「」

真鍋和——

本当、頼れる友達だ。

今度、何か奢ってあげよう。

和は部活申請用紙を机から取り出し、俺たちの代わりに項目に記入していく。

「軽音部、と。部員は5人。で、顧問は？」

「「「顧問？」「」「」

唯たちは声をハモらせながら質問を聞き返した。

すっかり、俺は顧問の事忘れてた……

「アンタたち……」

まったく弁解する余地もない……

――――

『山中さわ子。我が校の音楽教師である』

『その綺麗な顔立ちとやわらかな物腰で生徒だけではなく教師の間でも人気が高い。さらに楽器の腕前や歌声も素晴らしく……』

「……あの……」

『フアンクラブが存在するほどの人気がある』

「さっきから何を言ってるの？」

山中先生がそう言った瞬間――

律

←

俺

絢 律 零

唯

と、言う感じで俺たちが現れた。

「あ、あなた達!？」

山中先生は、突然、律の背後などから現れた俺たちに驚いたようだ。

「「「先生!」「」「」

「は、はい」

「軽音部の顧問になってください!」

「まだ、顧問いなかったんだ」

やっぱり、呆れられたようだ。

仕方ないやなく俺も自分たちの事ながら呆れてるもん。

「先生しかいないんです!」
「お願いします!」

山中先生は、俺たちの顔を見て言いにくそうに、

「ごめんなさい。なつてあげたいのは山々だけど、私、吹奏楽部の顧問しているから掛け持ちはちょっと……」

と、言った。

こちらが無理を言ってるのだから、申し訳なそうな顔をされるのは辛い。

「そんな……」

「本当、ごめんなさいねえ」

『今まで声をかけてきた男は数知れず……』

「だ、だからおだてても無理です!」

とか言いながら、まんざらでもないって顔してるんですけど。

「時間なら取らせません」

「練習なら自分たちでやりますから」

「ここに名前を書いて、判子を押すだけ!ねえ、簡単でしょう?」

漣・ムギ・律は、どうしても山中先生に顧問してもらいたいようだ。

「ちょ、ちよっと!？」

「先生。先生ってこの卒業生ですよね？」

さっきまで、唯が静かだったのは山中先生の顔をじーっと見ていたからか。

「え、ええ……」

「さっき、昔の軽音部のアルバム見てたんですけど……」

「ええ!？」

唯の話を聞いて、山中先生の顔色が変わった。

「うーん」

「どうかしたのか？」

「あ、アルバムはどこにあるの？」

そう言いながら、クルツと方向転換をする山中先生。

「えっ、部屋ですけど」

「そう……」

「先生？」

すると、突然、廊下を走り出す山中先生。
先生が廊下を走っていいのかよ！

「俺、ちょっと山中先生を追いかけてみるわ！」

「空、ちよっ……」

漣が喋り終えるのを待たずに俺は山中先生の後を走って追いかける。

追いかけたのだが……

……追いつけなかった

だって、山中先生……ジャンプしたり、くぐったり、回転しながらジャンプしたりと無茶苦茶なんだよ！！

結局、律達と一緒に音楽準備室へ……

そこには山中先生がやっぱり居て、アルバムを開いていた。

「やっぱり、先生なんですネ？」

「ほら、この人」

アルバムに貼られていた写真を山中先生に見せる。
いつ、この写真だけ剥がしてたんだ？

「よく、分かったわね……そうよ……私軽音部にいたの……」

「い、意外でした」

俺もあの走りを見ていなければ意外だと思ったたかなあ。

「じゃあ、もしかして…この声も？」

唯はどこからかラジカセを取り出し、再生ボタンを押した。
すると、

『オマエラが来るのを待っていた！！シャッター！！』

と、合宿の時に聴いたあのテープが再生された。

「やめて！！恥ずかしい！！」

山中先生は耳を塞ぎ、しゃがみ込みながらそう言った。

やっぱり、これも先生だったのか……

「聞こえない、聞こえない」

俺の横にいた漣がいなかったら、山中先生の横で一緒に耳を塞ぎ、しゃがみ込んでいた。

「まだ、引きずってんのか……」

可哀想な漣……

「あれ？じゃあ、ギターも？」

「そっか！弾いて、弾いて」

唯はアンプに繋げてある自分のレスポールを先生に渡した。

あれ？ギターを持った瞬間、先生の雰囲気が変わった！？

「せ、先生？」

「くつくく……しゃーねーなー……」

そう言いながら眼鏡を外す山中先生。

（（（目つき変わったー！？）（（（

眼鏡を外した山中先生の目は、完全にヤバい人の目だった。

か、狩られる……

絶対に狩られる……

そう本能が俺に訴えかけるぐらいである。

ギターを持った山中先生は、

速弾き

タッピング

歯ギター

などのテクニクを披露し、

「オマエらー音楽室好きに使い過ぎなんだよー！！」

と、歯ギターをした勢いのまま俺たちに注意をした。

「「「「「ごめんなさい！」「」「」

俺たちは言い知れぬ恐怖から土下座をして謝っていた。

「だいたいなー！……今の見た？」

「「「「「うん」「」「」

それを聞いた先生は床に座り込んだ。

ふうふうやっと素に戻ってくれたのか……良かった……

「……うう……先生の時はお淑やかキャラで通すって決めてたのに……」

「先生……」

「あれはもう、8年も前のこと……」

「いきなり語り出した!」

「お前が言うか?」

「私は……」

今日は、人の語りをよく聞く日だな。

#16 歌詞！（前書き）

今回で顧問編は終了です！

桜高祭編に行く前にオリジナルを1話だけ入れるつもりです。

16 歌詞！

けいおん！

15 歌詞！

山中先生が語り出した話を、俺なりに話すところなるー

話の始まりは、8年前の春のこと。

8年前の山中先生は、かなり大人しく真面目な美少女であった。

そんな山中先生は、ひとりの男性に恋をし、勇気を振り絞って告白

した。

だが、

「ごめんね。俺、もっとワイルドな女の子が好きなんだ」

と、言われ振られた……

しかし、

山中先生はその男性の事が諦められず、彼のタイプであるワイルドな女性になってから、再度、告白する事を決心した。

ワイルド１段階は、軽く化粧をして、ピンクのメッシュを入れる程度で、まだ山中さわ子と分かるものであった。

ワイルド２段階は、とごぞク。ウザーのようになり、一目では山中さわ子と分らないものであった。

ワイルド最終段階は、……の伝説。ジュラの仮面で見たことのあるような仮面、獣の皮と思わしき衣を身に纏い、完全に山中さわ子と分らないものになっていた。

ワイルド最終形態で、再度、告白した山中先生に男性は、

「さわ子……やり過ぎ……」

と、言ったそうだ……

―――以上で、話は終わり！

「先生……」

昔の事を語りを終えた先生に何か言ってあげようとする、唯。

「いいの…慰めの言葉なんて……」

「先生……顔上げて」

俯いた先生の肩に手を置き、話し掛ける律。

「りっちゃん……」

おっ！なんか良いシーン……

「バラされなくなったら、顧問やって下さい」

なんて、思えたのは一瞬だけかよ！

「りっちゃん、たくましい子!!」

ああ、本当になあ……

「おっ？ムギちゃん？」

「どうした？」

「うーん、ムギちゃんが…」

ムギの様子を窺ってみる。

何か、ぼーっとしてるような？

どうしたんだろう？

「ムギ！」

「うわぁ！？」

「大丈夫？何かぼーっとしてるよ。風邪？」

「う、ううん…」

風邪でないらしい。

なら、どうしてぼーっとしてたんだろう？
謎だ？

――

何故、ムギがぼーっとしていたのかを考えているうちに、山中先生に俺達の演奏を見てもらう話になっていた。

俺達、軽音部の演奏を誰かに見てもらうのって、考えてみると初めてだな。

ちょっと、ほんのちょっとだが緊張する。

いやあ、緊張するな。

♪ ♪ } }
♪ ♪ } } } }
♪ ♪ } } } }
♪ ♪ } } } }

演奏が終わる――

なかなかいい演奏が出来たと思う。これも合宿の成果かな？

「って、感じのオリジナルなんですけど……」

律の方から山中先生の方に振り返りながら漣が尋ねる。

「ふーん……」

「どうですか？ “顧問”として」

顧問を強調するなつての…

「そうねえ……前ノリ、後ノリとか、リズムセクションがバラバラとかいろいろ気になる事はあるけど……まず、ボーカルはいないの？」

「「「「「！！！！！」」」」」

忘れてた！！

本当に忘れていた……

「じゃあ、まさか歌詞もまだ…とか？」

こつちもすっかり忘れてた!!

「え、えーっと……」

「それでよく学園祭のステージに出ようと思ったわね」

「すみません」

「本当にすみません」

あつ、震えてる! 凄く怒ってるぞ、おい!

「音楽室占領して今まで何やってきたの!! ここは、お茶を飲む場所じゃないのよ!!」

「怒られた……」

すでに涙目な唯。

俺も若干……

「大体ね!!」

そう言いながら俺達に近づいて来る山中先生の恐怖から身を縮める
澪と唯。

「先生！！」

「あんっ！？」

ギター弾いた時と同じヤバい目付きになってるよ、先生！

「け、ケーキいかがですか？」

それは無謀だぞ、ムギ！

「いただきます！！」

えー！！！

「「「「「いただきますかい！」「」「」

それから、部活はケーキを食べて、雑談して終わった。
歌詞は明日の部活までに多分、漑が考えてくるであろう。

翌日――

「「出来た!?!」」

「あ、ああ……」

やはり、漑はちゃんと歌詞を今日までに作ってきてくれたようだ。

「見せて見せて!」

「えっ!?!もう?」

「いや、もうって……」

「私も見たいな」

「で、でも、やっぱり恥ずかしい」

俺は山中先生と同じく、唯達とは少し離れた所で様子を見ている。

「大丈夫だよ」笑ったりしないし」

「そうそう」

「でも……あー待って！」

「待てない！持ってきたって事は見せるってことだろう？」

「澪ちゃん、お願い」

「ちょちょーっとだけ、こそーっと私に」

あっ！山中先生が少しずつイラついてきた。
まあ、無理もないか。

「あーずりいー！見せるのなら私の方が先だろ？」

「ええーなんで？」

「何故なら、私が部長だから！」

「むーならば、私は澪ちゃんの心の友だから！」

「じゃあ、私は澪ちゃんの心の友その2だから」「小癪な！私なんか澪の心の故郷だぞ！！」

「いつからそうなった？」

だんだん、訳が分からなくなってきたな…
それに山中先生のイライラが……

カウントダウン、3秒前！

「あゝ田舎のお婆ちゃん元気かな？」

3――

「いや、今、関係ないから……」

2――

「あー去年、年賀状出したっけ……」

1――

「話を逸らすな！」

0――！

「はやく、見せんか――いつ――！――！――」

そう言つて、今まで溜めていたイライラを放出しつつ、漣から歌詞の書いてあるルーズリーフを奪い取った。

「どれどれ」

俺は左から、律は右からルーズリーフを見る。

そこには、

キミを見てるといつもハート

D O K I D O K I 揺れる思いは
マシユマロみたいにな　ふわ　ふわ

いつもがんばるキミの横顔

ずっと見ても気づかないよね

夢の中なら二人の距離縮められるのにな

ああカミサマお願い

二人だけのD r e a m T i m e ください

お気に入りのうさちゃん抱いて今夜もオヤスミ
♪

ふわふわ時間　ふわふわ時間　ふわふわ時間

――と、書かれていた。

それを見た俺・律・山中先生は、

「あああ……」

「かゆい……」

「破りたい……」

と、いったようにダメージを受けていた。

これって、#6　休日！の時に見た歌詞の完成版か？
あれから、さらに進化したようだな！？

「わ、私としてはいい感じ書けたと思うんだけど……」

漣の声が震えている！？

もしかしてー

3人同時に澪の方を振り返る。

やっぱり、泣きそうになっていた!!

「やっぱり、ダメかなあ……」

「ダメって言うか……」

「そうそう、ちよいイメージと違ったって言うか……」

「そうだ!! ちよつと曲の感じと歌詞が、なあ……ほら、唯も何か
言え!」

必死にフォローをする俺達。しかし、俺達だけでは無理と感じ、唯
に話を振ってみた。

すると、

「すくいいい……」

予想外の言葉が返ってきた!?

「私はすごく好きだよ、この歌詞!」

唯は澪の手を握りながらそう言った。

「ほ…ほんと?」

「む、ムギはどう思う?」

律と俺は同じタイミングでムギを見た。
ムギは、

超うつとりしていた……

「ま、まさかムギも気に入ったの?」

「はいっ」

「えっ、こづいつのアリ?」

「うん」

「ホントに?」

「イエス」

「マジで?」

「ほんとにいいです…」

どうやら、ムギもこの歌詞で賛成ようだ。

「さわちゃん!」

どうやら、律は、賛成派が3人となり、もしかしたら…もしかしたら、この歌詞で決定になる可能性が出て来て焦ってきたようだ。

「さわちゃん!」

「さわちゃんはこの歌詞ないと思うよね?」

「ええ、そうね」

「だよね! 勿論、空もこの歌詞はないと思うよね?」

「あ、ああ…そうだな…」

澪さん…そんなうるうるした目で俺を見ないで! この歌詞だけは…
…こんな恥ずかしい歌詞だけは勘弁して下さい!!

「ほら、3人とももう少し考え直そうよ。まずは、みんな落ち着いて…」

ホント、一旦落ち着いて考え直してくれ、唯・ムギ！

「わ、私もーこの曲好きかもー」

「あれえー！？」

「マジで！？」

まさかの山中先生の発言により、

賛成：4、反対：2

と、なりこの歌詞で決定となった……

「それじゃもう、この歌詞でいくか……」

「わーっいつ」

わーっいつ、じゃねえよ…唯・ムギ。

「よかったね、澪ちゃん」

「あっ、うん」

「じゃあ、澪がボーカルってことで」

「ふえっ！？わ、私は無理だよっ！」

「なんで？」

「だ、だって……だってこんな恥ずかしい歌詞なんか歌えないよお！」

それでいいのかよ！

「「おい、作者……！」」

まさか、作者もこの歌詞が恥ずかしいものだとしっかり理解していたとは……

「困ったわね」

「澪がダメとなると……」

チラッと唯の方をしてみる。

うわぁ〜すごく歌いたそうだ。

なので、スルー！

「ムギやってみる？」

「えっ、私は……キーボードで精一杯だし……」

「そっか……それじゃあ」

もう一度、唯の方をしてみる。

ウィンクとかして、めっちゃアピールしている。

ここでもスルー！

「あはは…」

ムギは苦笑いをしながら断る。

「だよね…」

また、唯の方をしてみる。

「あつ、あー」

発声練習をしてアピール。

ここでもう一度、スルー！

ムギの方をしてみる。

すごく困ったような顔している。

なので、最後に唯の方をしてみる。

泣きそうになっていた……

「……唯、やってみるか？」

「えっ、私！？でも、歌そんなにうまくないし……私でつとまるかどうかかわかんないって言うか……」

「じゃあ、いいや」

あっさり言うな、律は…

「ごめん！嘘、歌う！！歌いたいですーっ！！」

最初から素直に言えば良かったのに。

「えーそれじゃあ、歌ってみよっか！」
「ラジャー」

律達は長椅子に、山中先生は手掛けの所に座り、俺は立ったまま唯が歌うのを待つ。

「…キミを見てるといつも……」

「ちょっとちょっと！ギター弾きながら歌わないと」

「あつ、そっか忘れてた」

「おいおい」

これって、もしかして…

「えっと…」

♪——♪——

「……今度は歌…忘れてる」

やっぱり、唯は期待通りの事をする子だった！！

「ギターを弾きながら歌が歌えない…」

よっぽどその事がショックだったらしく、唯は床に座り込んでいた。

「仕方ないわねえ…先生が特訓してあげる」

「先生……」

「それじゃあ、まず齒ギターのやり方を……」

「それはいいです。」

「唯に変な事を教えないで下さい!!」

いや、マジで頼みますよ、先生!

「じゃあ、振り落とされないように着いてきなさいよ!」
「ラジャー!!」

そう言って、唯と山中先生は走って部室を出て行った。

あの人達はどこに行くんだろう?

「空、律、ちょっと…」

「何だ？」

「ムギってさ…もしかしてさわ子先生の事…」

「何？」

「だから、さわ子先生をさあ…」

「えっ、マジで!？」

「いったい、何がマジで!？、何だ？」

「俺はさっぱり分からないのだが…」

「ムギ、さわ子先生の事好きなのか？」

「おいっ、バカ！」

「零は慌てて律の口を手で抑えた。」

「マジで!？って、そう言う事だったのか…」

「ほえっ…」

「へえ…」

「いえ…ただ女の子同士つてもいいなって」

「まさか…」

「なんだ〜よかった」

「えっ！？いいのかよ？」「本人達がよければ、いいんじゃないでしょうかつ」

「えっと…あーうん？」

「何を言ってるんだ？」

「さっぱり、分からん…」

それから、一週間――

「えっと、ボーカルが唯で…曲目が『ふわふわ時間』…と…オツケー！じゃあ、出演時間決まったら連絡するね」

「よかった。わざわざ、来てもらってありがとう」

「これも生徒会の仕事だから」

「生徒会も忙しいのな」

「まあねえ。でも、ホントに唯で大丈夫なの？」

幼なじみなんだから信じてやれよな。

「先週から、放課後さわ子先生の家で特訓してるからな！」
「多分、間に合うんじゃないかと…」

カチャッ――

部室のドアが開き、そこには唯と山中先生の姿があった。

「待たせたわね。完璧よ！」

「……」

「さあ、唯ちゃん…見せてあげなさい！」

「——」

「……おおーっ！」

「すげえ！」

「上達している！」

「自信に満ちあふれた表情！」

「一週間前の唯とは、別人だ！！」

「キミを見てるといつもハート……」

「『『『あー』』』」

ドカーン――

倒れる、俺・律・漣・ムギ。

そりゃ、今の唯の声を聴いたらみんな倒れるって！
だって…だって、唯の声……枯れてるんだから！！

「てへっ、練習させ過ぎちゃった」
「声、枯れちゃった」

「『カワイ子ぶつても駄目だ！！』」

ツッコむ、俺と律。

「そんな…じゃあ、ボーカルは？」
「変更するなら今日中よ？」
「えっ！？そうなかあ…だとすると……」

みんな、一斉に漑を見る。

「へっ？」

どうやら、みんなの視線が自分に集まっている事に気が付いたようだな。

「確かに、漑ちゃんなら歌詞覚えてるだろうし」

「歌詞作った本人だしな」

「頑張つてね、漑ちゃん」

「頑張れ!!」

「ハスキー唯からもお願い」

「はううう……」

顔を一瞬にして真っ赤にして、ボタンと倒れる漑。

「おい！」

「零ちゃん！？」

「しっかりしろー！！」

あ、頭から湯気出てるぞ！？？

あー！どうなるんだろう、学園祭……

本番まであと3日ー！！！！

#17 桜高祭！（前書き）

高校最後の文化祭でライブをする事になり、その練習でなかなか投稿出来ませんでした……

まあ、そんな事はさて置き、今回から『桜高祭編』スタートです！！

#17 桜高祭！

けいおん！

#16 桜高祭！

桜高祭、当日――

今日、俺・漣・律・ムギが所属する一年五組は、田井中律企画のお化け屋敷を行う事になっている。

律企画のお化け屋敷は凝りに凝ったモノで、全ての作業を桜高祭当日までに終える事は不可能かと思われたが、俺と数人のクラスメイ

トの徹夜により何とか完成を見せた。

――10:12。

朝のシフト（お化け役）が終わった俺は、やや睡眠不足気味の頭をふらつかせながら他のクラスの模擬店を巡ろうしていた。

ただ廊下を歩いているだけだと言うのに、周囲の桜高生やヒマな父兄や一般の人達の視線が俺に集まる。

そりゃ、今の俺の格好……

燕尾服にシルクハットを被り、襟の立った表が黒で裏が赤のマントを羽織った最もポピュラーな『吸血鬼』の格好は奇抜なもので面白いのかもしれないな……はあ……

それにしてもこの衣装、中三の時に着た物より着心地が良いな。

この衣装を用意したのは、多分、ムギだな。

だとすると、この衣装は中三の時に着ていた安物なんかと比べ物にならないほど高級な物だな……絶対汚さないようにしよう！

そんな事を心の中で誓いつつ廊下を歩いていると、

ぐうー

と、お腹が鳴った。

そう言えば、朝から何も食ってなかったなあ…

燕尾服のポケットから学園祭のパンフレットを取り出し、飲食物を取り扱う模擬店を調べてみる。

おっ、近くの教室で焼きそばをやってるようだな。行きますか！

.....

「焼きそばください」

「はい、一人前ですね。350円です」

代金を渡し商品を受け取る。

作り置きのようなだが、まだ温かい。作ってさほど時間が経っていないようだ。ラッキー♪

俺は教室内で食べる人達用に用意されたテーブルに腰掛け、食べ始めた。

買った焼きそばはキャベツ多めの肉多めで、うまいかどうかと言われるとかなりうまかった。

ものの5分で食い終えた俺は、空の容器・割り箸を分別してごみ箱に入れて教室を出た。やっぱ、これだけじゃあ物足りないよな。さて、次はこの店に行こうか…

また、燕尾服のポケットから学園祭のパンフレットを取り出し、飲食物関係を取り扱う模擬店を探してみる。

近くでやってるのは……たこ焼き、お好み焼き、フランクフルトか。

まず、フランクフルトの店に行ってからたこ焼きの店へ行くか！

いつもと違う学園の雰囲気になんか浮かれてる気がするが、今日ぐらいいいよな。

学園祭……最高！！

――――

――10:33。

フランクフルト、たこ焼きなどの腹持ちのよいものを食べ終えた俺は、次にスイーツ系の方を攻めてみようと思い、クレープの模擬店をやっている教室に向かっていった。

今、向かっているクレープの店は、生クリームやフルーツ、ジャム、チョコレートソース、アイスクリームなどを包み込んで菓子として食べるクレープ・シュクレ。「砂糖味のクレープ」をメインとする料理部が出店している模擬店だ。

あちこちで聞いた話によると、クレープはかなり美味しいらしく、既に模擬店をやっている教室には長い蛇のごとき列が出来ているらしい。

なので、赤髪の俺は通常の人のお3倍の速度で人込みの隙間を通り抜け目的地まで突っ走っている。

誰よりも速く…

誰よりも速く…

ハ。テのごとく――！

.....

「ねーねーいいじゃん――！」
「い、嫌です！」

料理部が出店しているクレープの模擬店まであと少しの所で、学園祭を満喫している俺を興奮めさせるような会話が耳に入ってきた。声のする方向を見してみる。

俺と同じくらいの年齢の二人組の男が、中学生ぐらいの小柄な体格で黒髪ツインテールの女の子をナンパをしていた。

端っから見過ごすなんて選択肢はない。

だけど、今からナンパをしているヤツらの所に行くのは、別にあの女子中学生を助けにとかじゃなくて、ただあの二人組の男が目障りだから排除しに行くだけだからな！

「おい、テメエ、いい加減にしろよ」

女子中学生を逃がさないように掴んでいる男の手首を握り力を込める。

最初から全力全開で。

「い、痛い！痛い痛い！！」

俺に手首を掴まれている男は大声を出しながら痛がりじたばたとする。

俺の握力は男子高校生の平均的な握力をゆうに超えている。そんな俺が全力で掴んでいるのだから痛くて当然か…

あまりにもうるさかったので男の手首を掴んでいた手を離してやる。

さて、あと1人……

「生きたまま背中から皮を剥いで剥製にして欲しくなかったら……
とつとと失せろ」

「な、なんだとこの野郎!!」

ギロツーー

つと、もう1人の男を睨み付ける。

「……………ヒィ……………」

おっ、ビビってるビビってる。

「「「お、覚えてやがれ!!」」」

これは勝てないと判断した二人組の男は、三下の悪党のような台詞を言って去っていった。

本当にあんな台詞を言うヤツが漫画とかアニメだけじゃなくて現実いるとは…驚きだ。

これで終わりだな。さて、クレープ食いに行こう。
そう思い、この場を去ろうとすると……

「ま、待ってください!」

と、呼び止められた。

「はい?」

「あの…助けていただいて本当にありがとうございます!何かお礼がしたいのですが」

「あゝ別に気にしないでいいですよ。そんなの」

「そんなワケにいきません!」

「いや、本当にお礼なんていいですよ。俺があんなンパ野郎たちを蹴散らしたのは目障りだったからで、あなたを助けようなんて思

ってなくてですね…」

必死にお礼をする必要性のなさを説明する。

その間、黒髪ツインテールの女子中学生は唯と同じぐらい…いや、もしかしたらそれ以上のキラキラとした純真無垢な瞳で俺を見つめている。

そんな瞳で見つめられると、どうしていいのかわからなくなる。

頼むから、俺をそんな目で見ないでー！ー！ー！！

「それでも、結果的には私はあなたに助けてもらったワケですから、ちゃんとお礼をさせてください！！」

この女子中学生、なかなか頑固だな

「さっきも言ったとおり、“あなた”にお礼をしてもらう理由がです…」

「中野……中野梓です」

「えっと…じゃあ、中野さん。お礼の件なんです…」

「はい！」

「お礼をしないって事がお礼じゃあ…」

「駄目です!!」

やっぱり、駄目ですか…

こうなったらー

「頬にキスしてもらっ…なんちゃ…」

「いいですよ」

「はあ!？」

中野は俺が驚いている隙に近づき、背伸びをして頬にキスをした。

いや、冗談のつもりだったんですが……

「こ、これでよろしかったでしょうか？」

顔が真っ赤な中野。

多分、俺も顔真っ赤だな……

「は、はい！とても満足しております！！」

「それならよかったです。えっと、それでは…失礼します！！」

そう言つて、中野は背中を向け、もの凄いスピードで走り去つていった。

中野梓…ね……

何故だか解らないが、また桜高で逢える気がするんだよね

もしかして来年、桜高に入学して、軽音部に入部したりしてな……

#18 成長！（前書き）

今回も『桜高祭編』のお話です。
もう少しだけ『桜高祭編』にお付き合いください！

#18 成長！

けいおん！

#17 成長！

――11:00

ライブの前に練習をしておこうと、部室である音楽準備室へと向かっている最中、

多分、部室には漣だけしかないだろう。

そう思っていたのだが、実際、部室には俺以外の軽音部メンバーが揃っていて、練習をしていた。

遅れてきた俺は、

「「「遅い!!」「「「

と、怒られた……

……

♪ | ♪ | ♪ | | ♪ | |

♪ } ♪ } ♪ } } } ……

「よし、まあまあんじゃない?」
「うん、バッチリだった!」

律・ムギが言うようになかなかの演奏が出来たと俺も思う。

さわ先生に指摘された、前ノリ・後ノリ・リズムセクションもほぼ完璧に合っていた。

それに、さわ先生の特訓を受けたお陰で唯は全くミスをしなくなり、いい演奏が出来るようになった。

武道館ライブも夢じゃなくなってきたな……

「澪ちゃん、大丈夫そう？」

唯は枯れた声で、不安そうな澪に訊ねる。

やっぱり、2・3日程度では枯れた声は治らなかったか……

「……………うん……」

「今の感じでいきましょう」

「ああ、今の感じ今の感じ……」

カチャッー

「みんないるわね」

と、言いながら我らが軽音部の顧問である山中さわ子先生が部室に入ってきた。

「先生、どうしたんですか？」

「不意ながらも軽音部の顧問になった事だし、何か手伝う事ないかーって思ってた……衣装作ってきましたっ！！」

と、言ってさわ先生は俺達に、黒を基調としたゴシックロリータ調の衣装と白を基調としたゴシックロリータ調の衣装を見せてくれた。

よくこんな衣装を作れるものだな。どれだけ手先が器用なんだよ、この先生は……

「ノリノリだっ！！」

俺がそんな事を考えている間に、律がツッコミをいれた。

「いや、先生…気持ち是有り難いんだけど……」
「うん？」

律の言っている意味が解っていないさわ先生に俺は、

「……あ、あんな服着て歌うの…大勢の前で………」

律の隣にいるガタガタと震える澪を指差して

「ちょっと、タイミング悪かったかな」

と、説明した。

「これはお気に召さなかったかー」
「うんうんうんうん」

と、思いっきり頭を上下に振り頷く漑。
よっぱど、この衣装を着て歌うのが嫌らしい。

「なら、私の昔の衣装はどう？」

どこから取り出してきた衣装は、8年前、さわ先生がワイルド最終形態の時に身に纏っていたらしい、仮面と獣の皮と思わしき衣だった。

「あーやっぱり、さっきの服着たくなってきたー！」

漑の言う通り、コレを着て大勢の前で歌うより、さっきのゴシックロリータ調の衣装を着ての方がまだマシかもな…

「ストップ、さわちゃん！」

俺よりも先に、暴走するさわ先生を律が止める。

「こんな衣装、濡じゃなくても恥ずかしいよ」

「だよな！」

「そうかなあ？頑張って作ったんだけどな」それに……」

さわ先生の視線を追ってみる。そこには、スクール水着を着た唯とナース服を着たムギがいた。

コイツらはいつそんな服に着替えたんだ？

ってか、どこで着替えたんだ！？

ま、まさか……ココで………

あまり深く考えないようにしよう…

「唯ちゃん達は喜んで着てるわよ？」

「あらあら」

ツッコける律。

「って、お前らコラー！！」

「もう…何でこんな事に……」
「まだ緊張してるの？」

ドア近くにいたさわ先生は、一瞬で机近くにいる漑のもとへ近づき、

「漑ちゃんだって分からないようにメイクしてあげようか？」

と、デス声で漑に訊ねた。

「い、いえ！結構ですっ！！」

漑は半泣き状態でそれを断ったのであった。

「じゃあ、本番頑張ってね！」

騒ぐだけ騒いで帰っていたさわ先生。
いったい、さわ先生は何をしに来たのだろうか？

謎だな…

「なあー、私、今ので全部忘れちゃったよー!?」

「練習しよう?それしかないわ」

「そうだ、練習だ!何もなかった…何もなかったんだ……」

律は先ほどの事を無かったことにしたいようだ。

律の言う通り、何もなかった事にするのがいいかもしれないな。

「は、ははは……」

雫の滂いた笑みが哀しく響いた……

――――

12:00――

――ライブ3時間前。

「じゃあこれ、講堂まで運んどいて」

「あいよ」

「重いから気をつけてね」

「わかってるよ。そう言えば澪は？」

「ああ、澪には他の事やつてもらってる。もし、今の澪に講堂まで機材を持って行かせたら絶対に……」

『私がボーカル……大勢の前で………』

「……なんて言いながら機材落とすだろうからな、危なっかしくて運ばせられないよ」

「あー…そうだな」

確かに、今の澪に機材なんか運ばすのは危なっかしいだろうな。確実に今なら落とすだろうし…

「じゃあ、講堂まで運んでくるよ」

「うん。お願い」

先に他の機材を運んでいる唯やムギに追い付くために、少しだけ急ぐ。

たっ、たっ、たっ、たっ、たっ、たっ。

どこぞの神原さんのような細かく刻まれたリズムが小気味良い音を立てながら人込みの隙間をすり抜けて、持っているアンプをぶつけたり、落としたりしないように注意をしながら体育館へと突っ走る。本家本元の神原さんのようなスピードは出ていないと思うが、それなりのスピードは出ているはずだ。

神原走りをしたおかげで案外すぐに、ふらふらしながらアンプを運ぶ唯に追いついた。

「よっ！」

「あっ、空くん」

「何、ふらふらしながらアンプ運んでんだよ？」「だって、アンプって重いんだもん…」

確かに、非力な女子高生の腕力ではアンプを重いかもしれないな…

「なんでアンプってこんなに重いんだろう…」

それは多分、このアンプが真空管アンプだからだろうか？

なぜ、アンプが重たいのか？なんて考えた事なかったからな〜あとで、調べておくか。

「ほれ、アンプ貸せ」

「えっ？」

「そんなにふらふらしながら持つて行つてると、誰かに当たつて迷惑かけるかもしれないだろう？危なっかしくて見てられないから、お前の分のアンプも持つて行つてやるよ」

そう俺が言つと、唯は、

「これは、私が使うアンプだから私がちゃんと持つていくよ」

と、言った。

「そう…か…」

中学生の頃、いつもぼんやりとしていたあの唯が、ちゃんと成長していた事に俺は驚いた。

この調子なら、お母さんのポジションにいる和も必要じゃなくなる日もやってくるのかもしれない。

その時、和はどんな顔をするのだろうか？

めっちゃくちゃ気になるな！

「ゆっくりでいいから、ちゃんと持っていけよ」「うんっ！」
「じゃあ、俺は先に行くから」

そういつて、俺はまた神原走りをして、アンプをさっさと講堂まで運んだ。

気のせいかもしれないが、唯と話している間、何度かムギが機材を講堂まで持っていく姿を見た。

汗ひとつかかずに何度も部室と講堂を往復するのも有り得ない！それに、部室と講堂を唯と話していたたった数分で何度も往復するのも可笑しい。

やっぱりあれは気のせい……………だよな？

#19 直前！（前書き）

BAYONETTAをプレーしていたら、中々、投稿出来ませんでした…

それはさて置き、今回も『桜高祭編』です！

19 直前！

けいおん！

19 直前！

1 2 : 3 2 1 1。

「はぁー、運び終わった〜」

音楽準備室に戻ってきた途端、床に座り込む唯。

「床に座るとスカート汚れるぞ」

「わかってるけど疲れて動けないよ〜」

「二人ともお疲れさん」

ドア近くにいる俺たちの近くに来て、労いの言葉をかける律。

「おう、お疲れさん」

「りっちゃん、疲れたよ」

「今、ムギがお茶の準備をしてくれてるからもう少し待ってこんな？」

「うん！」

元氣よく返事をする唯。

こんなに元氣があるって事は、案外、唯は疲れていないのかもな。

お茶の準備が終わるのを待つ間、俺はお茶の準備をしているムギの姿を見た。

パツと見た限り、全然疲れてないようだな、ムギは。

俺と同じくらい……いや、それ以上の機材を汗ひとつかかずに運んだはずなのに全く疲れていないとは、何ちゅうお嬢様だ。

「みんな、お茶はいつたわよ」

「わっはーい！さすが、ムギちゃん！」

そんな事を考えているうちに、お茶の準備が終わったようだ。
俺たちは定位置の席に座り、ムギの用意してくれた紅茶を飲み始めた。

相変わらず、ムギの淹れてくれる紅茶は美味い。

いい茶葉を使っているのもあるだろうが、ムギの淹れ方が良いお陰でこんなに美味しいのだろう。

こんなに美味しい紅茶を淹れてくれるムギには感謝だな。

窓から差し込む暖かな日差し・徹夜でのお化け屋敷作りの疲れ・ムギの淹れてくれた紅茶のトリプルパンチにより、やや睡眠不足気味の俺はノックアウト。

机に突っ伏し、完全に一眠りする体勢に入る。

いざ行かん、夢の中へ！

しかしながら、夢の中へと赤兎馬に跨り駆ける俺を妨害する存在がここにはいた。

「寝るな、空！起きろ！起きないと……キスしちゃうぞ」

律が起こそうと体を揺すってくる。

さっき、起きないとキスするって言ったか？

起きなかったぐらいでキスをされるのは勘弁だな…

仕方なく身体を起こす。

「……眠い」

「あつ、起きた……起きなくてよかったのに…」

律のやつ、小さな声で何って言ったんだ？

まあ、気にしないでおくか。

「…ふあゝ」

「空くん、寝不足なの？」

「まあーな。色々あつたんだよ。色々」

徹夜作業に始まり、吸血鬼姿でのお化け役のシフト、食べ歩き、ナ
ンパ野郎達の排除、機材の運搬など、がな。

.....

「りっちゃんと澪ちゃんって幼なじみなんだよね？」

「そうだよ」

「いつから一緒なの？」

「そりゃ幼稚園から一緒……あれ？小学校からだったけ？」

「「幼なじみ違うんかい」」

律にツッコミ、俺と唯。まさか、唯と一緒にツッコむ日が来るとは思ってもみなかったなあ。

「澪ちゃんって小さい頃から恥ずかしがり屋さんだったの？」
「そうだよ」

『私が』

「わっはー！きれいなかみだねー」

『…って言ったり』

「すごいー！ひだりききなんだー！すごい。みんな、みおちゃんすごいよー」

『…って言ったら』

「顔を真っ赤にして、恥ずかしがってたもんなー」

「いや、それりっちゃんのせいじゃん！ー」

ナイスツツコミだ、唯。

それにしても、まさか澪を恥ずかしがり屋にしたの原因が律だったとは……

ガチャツーー

「機材運ぶの終わったー？」

「あっ、澪ちゃん」

部室に入って来たのは、律に機材運び以外の仕事を任せられていた
澪であった。

「おっ？何か落ち着いてるな」

「ん？」

「はい、どうぞ」

いつもの席に着いた澪に紅茶の入ったティーカップを澪の前に置く
ムギ。

「あんなにボーカルするの嫌がってたのに」

「そんな、子供じゃないんだし……」

紅茶を飲もうとソーサーごとティーカップを持つ澪。

「いつまでも動揺してられないわよ」

そう言った澪だが、緊張からか震えていて、持っているカップとソ
ーサーが当たりカチャカチャ、と音を立てた。

（ ）（ ）（ ）めっちゃめっちゃ動揺してるし（ ）（ ）（ ）

「もうすぐ本番なのに、そんな調子でどうするんだよ…」

「もういやだ…」

ボソッと呟く漑。

「律っ！私とボーカル代わって！」

「…そしたらドラムどうするんだよ？」

「私がやるから！」

「んじゃ、ベースどうするんだよ！」

「それも私がやるからー！！」

「やってもらおうか！！逆に見てみたいわ！！」

確かにドラムをしながらベースをする漑の姿にはめっちゃくちゃ興味あるな。

「律ー、りーっー」

と、言いながら半泣きで律に抱きつこうとする漑。
そんな漑の姿を見た俺は、

「ちょっと、来い……」

「えっ！？ な、何なの空！？」

律に抱きつこうとする漑の手を引き、音楽準備室を出た。

そして、部室から少し離れたどこも使用していない無人の教室に入る。

「そ、空。どうしたんだいきな……」

ギュッー

「はえっ！？」

漑が質問を終える前に優しく抱きしめる。

俺が使える唯一の魔法。温もりを共有する事により他人を落ち着かせる事のできる、不思議な魔法。そんな魔法を使った。

「あの、その!？」

「少しは落ち着いたか？」

「……まだ……」

そう言った漣は、まだ微かに震えていた。

「漣なら出来る。

俺はちゃんと見てたから……この日の為に、一生懸命、頑張って練習していた、どうしようもなく恥ずかしがり屋で、頑張り屋な……大切な女の子である、秋山漣を、さあ」

震えを止めるため、漣の頭を優しく撫でながら、恥ずかしい台詞を赤面しつつ囁く。

「……空……／／／／」

「それでも不安なら、俺も歌うよ……コーラスだけだな」

「ほんとに？」
「うん」

メインボーカルが漣に決まったその日に、コーラスは俺と決まっていた。

唯は、のどを枯らしているため無理。律とムギは、楽器で精一杯なので無理。と、言う事で残っている俺と決まった訳だ。

恥ずかしい台詞などと言った甲斐もあったようで、先程まで微かに震えていた漣の身体からは、もう震えはなくなっていた。
もう、いいかなあ。

そう判断した俺は、ゆっくりと漣から離れた。

「大丈夫だよな？」
「うん！」

本当に大丈夫そうだな。

「えっと、その…じゃあ、俺、先に部室に戻っとくわー！」
「えっ！？空、ちょっと待って！」

そう言い、俺は漣の止める声も聞かずに、背中を向けて走って教室

から出て行く。

あんな恥ずかしい台詞を言った所為で、真っ赤になった顔を見られないために。

.....

澪 side 1

「『澪なら出来る。俺はちゃんと見てたから……この日の為に、一生懸命、頑張って練習していた、どうしようもなく恥ずかしがり屋で、頑張り屋な……大切な女の子である、秋山澪を、さあ……かあ……」

空が急いで出て行った教室で私は、あの、ツンデレの空が優しく抱きしめながら、囁いてくれた言葉を呟く。

恥ずかしくて、でも、凄く嬉しくて、心が温かくなる私が大好き人が言ってくれた台詞を。

空――

――大好きだよ――！

#20 ふわふわ時間！（前書き）

文化祭でライブをしたメンバー + α で、地元にある小さなライブハウスでライブをしてきた式です。

まあ、そんな話はさて置き、今回で『桜高祭編』は完結です！

次回からは、クリスマス編…とりたいところですが、たぶんオ리지ナルになる可能性が……

#20 ふわふわ時間！

けいおん！

#20 ふわふわ時間！

1113:28。

俺は、ムギが淹れてくれた紅茶を飲みつつ、まったりとリラックスをしていたのだが……

律は突然、

「あつ、MC考えておかなきゃ」

と、言い出した。

どうやら、ツッコミ担当及びストッパーの俺のリラクスタ임はここで終わりのようだ。

「MCってなに？」

「自己紹介とか…ほら、コンサートなんかで曲と曲の間で喋ったりするじゃん？」

「あーあるある！」

「皆さんー、こんにちはー！今日は私たち軽音部のライブにようこそー！！」

律は席から立ち上がって長椅子のある辺りまで行き、MCのような事を始めた。

「わーいわーい」

「あー」

唯は楽しそうに手を振り、ムギは興味津々ってな感じで律を見ている。

「じゃあ、メンバーを紹介しまーす！」

ギター！休みの日にはいつもゴロゴロ。甘いものなら私に任せろ！

！のんびり妖精……平沢唯ー！！」

「ジャンジャンー！ジャラジャラジャララーギュイーーン
！！」

律に紹介された唯は、ノリノリでエアギターを行った。

「キーボード！お菓子の目利きはお手の物。しっとりノリノリ天然
系お嬢様……琴吹紬ー！！」

「ポロポロポロポロポロローン！」

ムギも唯と同じように、楽しそうにエアキーボードを行う。

「ベース&ボーカル！怖い話と痛い話は超苦手。軽音部のドン。デ
ンジャラスクイーン……秋山澪ー！！」

ドーンッ！！

「あ、痛っ！！」

「誰がデンジャラスだ！」

「いや…そんな感じが……」

まあ、透って確かにデンジャラスなところあるよな。
思いきり蹴られた事とかあるし……

「次は、軽音部の黒一点！ギター！鉄血にして熱血にして冷血の男子高校生。ツンデレ界の赤い彗星……福岡空ー！！」

「鉄血にして熱血にして冷血って…俺は、吸血鬼……キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードかつ！！」「似た者じゃないなの？」
「違うわ！」

確かにミスドはかなり好きだけど……

「そして最後にアタシ、ドラムー！容姿端麗、頭脳明晰。爽やか笑顔で幸せ運ぶみんなのアイドル……田井中律ー！！」

ドッカーン！！

「あ痛っ！！！！」

「「自分だけ持ち上げ過ぎだろ!!」」

ツッコむ俺と漣。

「「あはははー」」

俺たちのやりとりを見て、笑いだす唯とムギ。

「あははは…ゲホッゲホッ…咽せた」

「あははは、あはは」

「ぷっ!? あははは」

笑いすぎて咽せた唯を見て漣も俺も笑い出す。

「えへっ、あははは」

みんなの笑う姿を見て律も笑い出した。

「「「「あははは、あははは」」」」

律が突然、MCの事を話題にしたのは、みんなの緊張をほぐすためだったのだろう、と思ったのは笑い終わった後の事であった。

――――

――14:54。

『以上、合唱部でした』

と、司会進行を行っている放送部員のアナウンスが流れ、幕が閉じる。

幕が閉じ、学園祭実行委員達がドラムやキーボード、アンプなどの機材をセッティングし始める。その間、俺はさっさと更衣室で制服からさわ先生が作ってくれた衣装（白い燕尾服に黒の上下）に着替え、講堂に集まっている観客を幕の隙間から覗き込んで見てみた。

わいわいーわいわいー

「マジかよ……」

予想以上の観客の数に、思わず驚いてしまった。確かに、こう言った学祭関連でのイベントは盛り上がる。盛り上がるのだが…これは異常だと思う。講堂備え付けの木製の長椅子は既に満席。用意されたパイプ椅子はほぼ満席で、この分だと追加席も急遽用意する必要があるであろう。

「うわー！人がいっぱい居るよー」
「ホントだー」

俺が客席の事を考えている間に、唯・ムギも俺と同じ様に幕の隙間から集まった観客を覗き見ていた。

「今こそ…」

律の声が背中の方から聞こえ、俺・唯・ムギは観客を覗き見るのを止めて律を見た。

「練習の成果を見せる時だぜ！」

「うん」

「はい」

「だな」

一人一人、律に返答をする。

「ちょ、ちよつと、律……」

「うん？」

漣の声のする方を見てみるとそこには……さわ先生作の黒を基調としたゴシックローリータ調の衣装を身に纏った漣がいた。

「やっぱ、こんな格好で出なきゃいけない？」

恥ずかしさからか軽く頬を赤く染めている漣。漣の衣装は、律よりも全然、露出は少ないのだが、やっぱり漣の性格上、恥ずかしいのだろう。

「ぶっ！よく、似合ってますわよ。漣ちゅわーん」

「うん、凄く可愛いよ！空くんもそう思うよね？」

「まあ、な」

「うっ！もう！！」

と、頬を真っ赤に染めつつ叫ぶ漣。
似合うや可愛いよなど言われて照れたのだろう。
そんなやり取りをしているうちに、

『次は、軽音楽部によるバンド演奏です。』

と、言うアナウンスが流れた。

皆に緊張が走る――

「空、掛け声！」

「おう！……って、俺かよ！？普通は、こういった時の掛け声は部長がするものだろう？」

「別にいいじゃん。それに私を含め、みんな。空に何か言って欲しいんだよ」

円陣のように輪状に集まったみんなの顔を見定める。

律の言う通り。どうやら、みんな、俺の言葉を待っているようだ。

しょうがねえな！

「これから始まるんだ…俺達、軽音部の初めてのライブが…
間違ったっていい。でも、楽しんで演奏しよう！心から！！
目指すは、武道館！
突っ走って行くぞーっ！！」

「「「「おーっ！！」」」」

「Let's Party！！」

各自、自分の楽器がセットしてある場所に行き、すぐに演奏が出来るようにスタンバイする。

幕が開く――

わあああああっ！！！！

ぱちぱちぱちぱち――

幕が開ききり、歓声と拍手が俺達を出迎える。

あちこちから、『何あれ?』・『可愛い!』・『何組の子?』などの声が聞こえ、何となくさわ先生が、

「私、グッジョブ!」

と、心の中で言っただなーと思った。

そんな事を思っている間に、漣はアイコンタクトで律に開始の合図を送っていた。

律がスティックでカウントを取り始める。

「1・2・3・4・1・2・3!!」

ジャジャジャーン!

『キミを見てるといつもハートDOKI DOKI

揺れる思いはマシユマロみたいにふわ ふわ

いつもがんばる(いつもがんばる)

キミの横顔(キミの横顔)

ずっと見ても気づかないよね

夢の中なら(夢の中なら)

二人の距離縮められるのにな

ああ カミサマお願い

二人だけの Dream Time ください

お気に入りのうさちゃん抱いて今夜も オヤスミ[♪]

ふわふわ時間（ふわふわ時間） ふわふわ時間（ふわふわ時間）

ふわふわ時間（ふわふわ時間）[♫]

ジャーン——……

演奏が終わる………

しんと静まり返る、講堂——

そして————

大喝采が、舞い降りた。

歓声と拍手に包まれ、俺……いや、俺達は何とも言い表せない充実感に満たされているのが分かった。

「みんな…ありがとーっ!!」

そんな充実感に満たされ、テンションが上がった漑は、大きな声で観客にお礼を言った。

そんな漑を見て、俺は、

（これで漑も恥ずかしがりも克服できそうだな。）

と、思った。

そうこうしている間にステージから降りなければいけない時間となった。メンバー揃って観客のみんなにお辞儀をし、颯爽とステージから降りていく…はずだったのだが………

ドッターン!!

「きゃんっ!!」

と、大きな音を立て、奇妙な声をあげてシールドに足を引っ掛けて転んだ溼。

転ぶだけだったら、まだよかったのだが……転んだ方向が悪く、観客にスカートの中……ホワイトとブルーのストライプのパンツが見えてしまっている。

それに気が付いた溼は、今まで見てきた中で、一番と言っても過言ではないくらい顔を真っ赤にし、

「き、き、キャーーーーッッッ!!!!!!」

と、学校中に響き渡るぐらいの悲鳴をあげた。

こうして、今年の桜高祭は幕を閉じたのであった……

翌日――

部室には、軽音部メンバー全員＋顧問が揃っていた。

「みんな、昨日はお疲れさん！」

部長らしくみんなに労いの言葉をかける律。

「「「お疲れさまー」「」」

「唯は、初ライブにしてはなかなかのものだったよ」
「いや」

律に褒められて照れる、唯。

律の言う通り。俺も昨日の唯は、特にミスも無く、なかなか良かったと思っている。

「漣と空は…ファンクラブまで出来たらしいぜ！」

どこからか、『澪ちゃんファンクラブ』・『空さまファンクラブ』と書かれたポストを取り出す、律。

「うわーっ、すごい!!」「どうよ、空?ファンクラブが出来た感想は?」

「特になし」

「ヒネた中学生が、よく書く感想の代表例ね。澪ちゃんにもファンクラブが出来た感想を訊きたいところだけど……」

「もう片方は……再起不能だから、ねえ……」

隅っこで体育座りをする、真っ白になった澪を見つめる。

どよーんー

と、した雰囲気の中、澪は、

「……パンツ……パンツ……パンツ……もう、お嫁に行けない……」

と、聞こえるか聞こえないかぐらいの声で呟いていた。

遷、復活までいっただれぐらいの時間がかかるのだろうか？
なるべく早く、復活することを祈る俺達であった。

#20 ふわふわ時間！（後書き）

前書きでも書いてあるのですが、次回からオリジナルの話を2・3話ほど書いていく予定なのですが……少し悩む所があり、まだ1話しか書いてません。

そこで、この小説を読んで下さっている皆様に、こんな話を読んでみたいなどのリクエストをいただきたいと思います！

もし、リクエストがある方は御手数ですが、感想板などに書いて欲しいと思っています。

それでは、よろしくお願いします！

#21 寄り道！（前書き）

ようやく大学受験も一段落つきました！

それは置いといて、皆様沢山のリクエストありがとうございます。
次回から出来るだけ皆様のリクエストに添えつつ、話を進めていき
たいと思います。

では、『#21 寄り道！』どうぞ！

#21 寄り道！

けいおん！

#21 寄り道！

「はあ………」

11月某日の秋の放課後。

放課後にしてはやや遅い時間。

俺は部室に向かいながら、深い……深いため息を吐いた。

「……はあ………」

その原因は、ここ数日の事――

――

廊下を歩ければ……

「…ねえ、あの人…」

「…軽音部の福間くんだよな？」

「そうだよ！」

「んっ？」

「…こつち向いたよ！？」

「…ね、ねえ、声かけてみる…？」

「あ、あんた行きなさいよ…」

「彼女いるのかなあ…」

キヤイキヤイ……

などと、騒がれ…そこかしこで居心地が悪いし…

極めつけは……

上級生の先輩たちに囲まれ、

「「「空くん!!」「「「「

「はいっ!?!」

「私と一緒に帰りましょう!」

「違うわ、私と!」

「私とよ!!」

「あたしとです!!」

「違います!私とです!!」

「「「^{あたし}私と一緒に帰るわよね!」「「「「

と、これの昼食バージョンを含め、一日2回も迫られるのである……

どうしてこうなったのか…その原因は、たぶん…いや、確実にあれ
しかない！

そう……

俺は許可してないってのに、結成されたファンクラブ。
『空さまファンクラブ』

しかない！！

何ちゅう、はた迷惑なファンクラブだ…

結局、先輩たちから逃げきるためにこんな時間まで隠れてなきゃな
らなかったし…

本当に、何で俺のファンクラブが出来たんだろうな。薄にファンク
ラブが出来るのは分かるが…

ってか、桜高祭が終わってもう数日が過ぎたんだぞ。そろそろ静け
さを取り戻してもいい頃だと思うんだけどなあ

「……………はあ……………」

もう一度、ため息を吐き、気疲れやらなんやらで重くなった頭を上
げ、現在いる場所を確認する。
すると、もう部室である音楽準備室近くまで来ている事に気が付く。

まったく、ここまで道のりをどうやって歩いて来たのか覚えていないのだが……
こりゃあ、まじでやばいなあ……でも、ムギの淹れてくれた紅茶を飲んだら回復するだろう。

そんな事を考えつつ、俺は心なしが早足で部室まで向かった。

……………

ガチャッ——

「ちいーッス」
「オーッス、空」

部室に入りつつ挨拶をすると、すぐに律が挨拶を返してくれた。

あれ？いつもならみんなが挨拶してくれると言ったのに、今日に限って律以外挨拶を返してくれない。

それもそのはず、現在部室には律しかいない。

いつもの席に座り、何故、他のメンバーがいないのか律に訊ねてみ

る。

「あれ、他のヤツらは？」

「今日、部活は休みだから来ないよ」

「今日って、部活休みだったのか！？」

「あれ、昼休みの内にみんなに伝えたと思ったんだけど……」

「昼休み……ね……」

確か、4限目終了のチャイムが鳴り終える前に急いで教室から飛び出して、昼休みまるまる使って先輩たちに捕まらないように隠れてたんだよな……昼休み……

「……だから、聞いていないわ」

「大変だったんだな……」

いやあ〜マジで大変でしたよ。昼休み中、見つからないように隠れているのは。

「あれ？なら、なんで律は部室にいるんだ？」

ふと、その事に気が付き訊いてみる。

「もしかしたら、雫や唯が部室に来ちゃったかと思って」

確かに、今のあの真っ白なままの状態の滯や、天然娘の唯なら休みだって聞いてても部室に来るかもな。

「そうだったのか。でも…」

チラッと部室に置かれている時計を確認すると、もう17:30前。

「この時間なら、もう誰も来ないんじゃないか？」

「それもそうか…」

「もう帰るだろ？なら、一緒に帰ろぜ」

「うん」

俺たちは、部室に鍵を掛け、職員室に部室の鍵を返し、一緒に下校する。

.....

「.....」

「.....」

帰り道――

今更ながら気が付いた事がある。

それは……今日の律は何かおかしい……と言う事だ。

いつもに元気な律が今日に限って妙に大人しい。それに、律のトレードマークと言っても過言ではない、カチューシャも今日は、外しているし。

いったい、どうしたんだろう？

そう思い、訊いてみる。

「あの、律？」

「うん？」

「あ、あの……」

「どうかした？」

そう言つて、顔を覗き込んでくる律。

「そ、そうだ！ちょっと寄り道したい所があるんだが、構わないか？」

と、まったく関係ない事を訊いてしまった、俺。何でだろ？やけに今日の律は可愛いと思つてしまうのは？

顔を覗き込まれた時、頭が真っ白になって訊きたい事を忘れてしま

った…

「どこに？」

「えっと…10GIA！」

「ああ、ムギんちの系列の会社の」

「そうそう」

本当、あの店がムギんちの会社の系列だって聞いた時はかなり驚いたよ。

「いつも使っているピックも予備のピックも結構、磨耗してきたから買いに行きたいんだけど」

「いいよ。私もドラムスティックとか見たいし」

こうして、咄嗟の一言により、寄り道をする事になった、俺たち。

そう言えば、

『下校時の寄り道は禁止！』

と、いった委員長台詞って俺、言われた事無いなあ。今度、委員長キャラっぽい和にでも言ってお貰おうかな……

.....

10 G I A I I I

レコードやCDなどを扱っている上の階からエスカレーターに乗り、
楽器を扱っている下の階を訪れる。

「やっぱり、ここは品揃えがいいよな」

「そうだね、いろんな物があつて目移りしちゃうよね」

それぞれ、自分の楽器のコーナーを回りたいところだが、せっかく
なので2人一緒に回ることにした。

まず、始めに向かったのはドラムコーナー。

「これがヒツコリー材で作られてるもつともポピュラーなスティック。
適度な固さと重さがあつて、暖かみのある音が出るんだよ」
「ほーう」

「それで、こっちがオーク材で作られたスティック。重くて固くて、
折れにくいんだよ。でも、音には暖かみがなくて無機質な感じで、
コントロールも難しいから、あんまり使われないんだよね、このスティックは」

「ほうほう」

「今度は、メイプル材で作られたスティック。軽い上に非常に固いからコントロールがしやすいんだけど、折れやすいんだよね」

「へえ」

このように律はあちこち移動しながら商品を楽しそうに見つつ、ギター担当の俺にもここにある商品の良し悪しが分かるように説明してくれている。

本当、これは勉強になるぞ。

「それで、欲しいものはあったのか？」

「うーん…何点か気になるものはあったけど、今はいいや。次は、ギターコーナーに行くぞ」

そう言つて、律は俺の手を握り、ギターコーナーまで引つ張って行った。

「ピックってこんなに種類があるんだ…」

ギターコーナーとベースコーナーの中間辺りに設置されているピックのコーナーで律はピックの種類の数に驚いていた。

「まあ、素材だけでプラスチックやセルロイドなどの合成樹脂や、デルリン、ゴム、フェルト、メタル、ナイロン等があつて、さらに形状だけで、正三角形型、ラウンドなおにぎり型、二等辺三角形のティアドロップ型、ホームベース型…」

などと、驚いている律に次は俺がピックについて説明し始めていた。

「硬さだけでもTHIN、MEDIUM、HARD、HEAVY、EXTRA HEAVYがあるんだ。この3種類からプレイスタイルや演奏者の好みによつて選ぶんだから、これだけの種類がないとなあ」

「確かにそうか。空はどんなピックを使つてるんだ？」

「俺が使つてるのは、素材はプラスチックで、形状は正三角形で、硬さはHARDの…この赤と白のストライプのピックだよ」

そう言つて、赤と白のストライプのピックを取る。

「へえ、それか。じゃ、私も」

律は俺と同じピックを一枚取つた。

「何で、ドラムの律がピックいるんだよ？」

「だって、空が使ってるものだから」

そう言い返されると、何も言えなくなってしまったんだが……

「……ントしてやる」

「えっ？」

「……プレゼントしてやるよ、それぐらいなら」

「ありがとう」

笑顔で礼を言う律。

その笑顔を見て、顔を赤くしてしまった俺は急いでレジまで行き、赤と白のストライプのピックを2枚、予備用のピックとして白のピックを1枚。計3枚のピックを買って店を出た。

……

黄昏時はとつくに過ぎてしまい、真っ暗になった帰り道を律と二人歩いて行く。

向かう先は、律の家。
律1人で帰るには、ちょっと遅くなって危ないと思い、送ることにしたのだ。

「本当にありがとう」

「何が？」

「プレゼントの事もそうだし、家まで送ってもらっている事もかなあ」

「気にすんな。好きでやってる事だから」

「……………気にするよ…バカ…」

俺に聞こえないぐらい小さな声で呟く律。

「えっ、何か言った？」 「ううん！別に」

「……………」

「……………」

会話がないうまま数分ほど歩いてうちに、『田井中』と書かれた表札がある家までたどり着いていた。

「空、今日は本当にありがとう。お礼がしたいんだけど」
「いって別に」

「それじゃ、私の気が済まないんだよ」

あんまり無碍に断るのも失礼かな、と思い俺は律のお礼を素直に受けとる事にした。

「わかったわかった。俺はどうしたらいいんだ？」
「じゃあ、目を閉じて、ちよっとしゃがんで……」
「はいはい。これでいいのか？」

「う、うん／＼／＼」

数十秒経っても何も起こらない……
中途半端にしゃがむってのは、微妙にしんどいのだが…

「そ、空／＼／＼」

「うん？」

俺は呼ばれたと思い、律の声のした方を向いた。

すると、

唇に柔らかな感触が……

俺は思わず目を開いた。そこには目を閉じた律の姿があった。

なんか律の顔が、ち、近い！？
って言うか、くっ、くち、唇が！？

ワタワタとパニック状態の俺に気が付いた律は目を開けパツと離れた。

「……………えっ…あ…い、今のって…」

「やつ、そ、その！？違うだ！本当は、ほっぺにキスのつもりだったんだ！なのに、なのに！！」

「……………」

「えっと、その！？じゃ、じゃあ！お休み／＼／／」

そう言って、ぽっかんとする俺を残し、顔を真っ赤に染めた律は急いで家に入っていった。

えっと……その……さっきのってキスでしたよね？

お、俺のファーストキス……

と言うか、明日からどんな顔して俺は律に会えばいいんだ――！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9930g/>

桜高軽音部！

2010年10月9日12時43分発行